

制改  
新文典  
初年級用

375.9  
Hal9  
資料室

41849

教科書文庫

4
815
41-1938
200030 2311

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

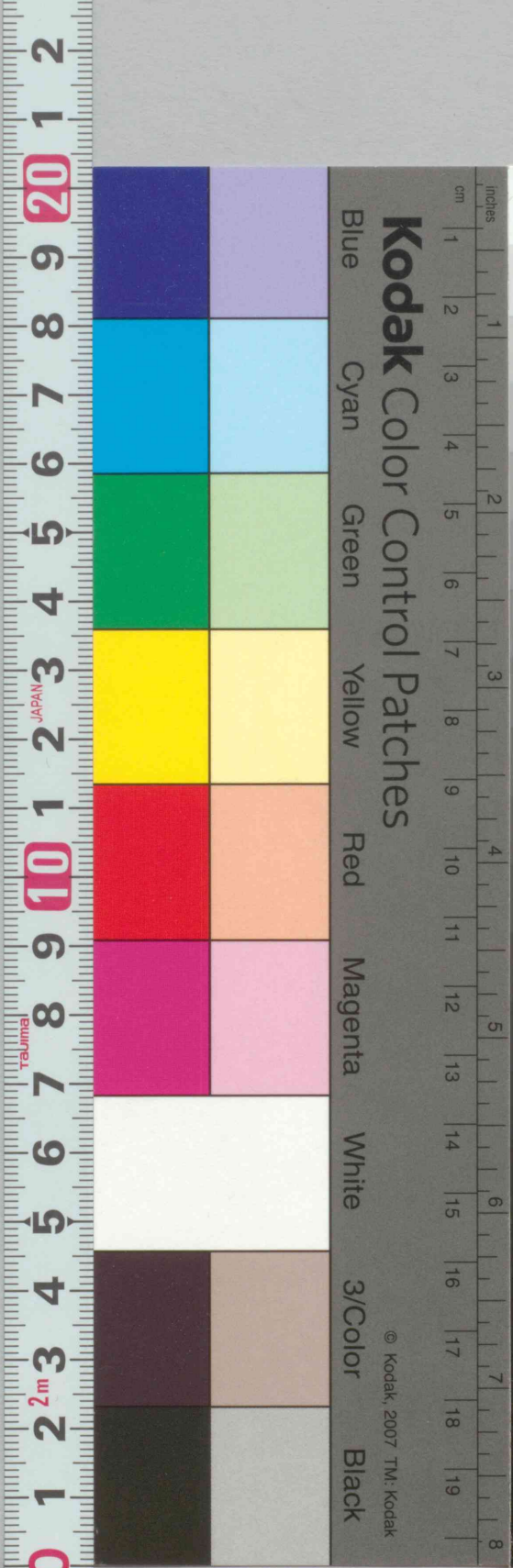


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak





資料一室

375.9  
Ha19

文部省檢定  
用科文漢語國校學中 日三月二年三十和昭

東京帝國大學教授  
文學博士 橋本進吉著

# 改新文典

初年級用

東京 富山房發兌





東京 富山 廣島 出版  
廣島大學 國語文法 教科書  
廣島大學 國語文法 教科書

例言

— 本書は、昭和十二年改正の中學校教授要目に準據し、中學校第一學年用の國語文法教科書として編じたものであります。  
— 本書の著者は、現時の小學教育の實際と社會の實情とから觀て、中學校の國語文法は口語文法から始め、之を基礎として文語や古文の文法に進むのが、最も自然な最適當な方法であると信じ、昭和六年、この方針の下に國語文法教科書、新文法の編纂を試みましたが、今回の改正によつて、第一學年に於ては口語文法の大要を授ける事と定められましたのは、豫ての愚見と合致するものであります。それ故、本書に於て、國語教育の進歩の爲に悦ばしく感ずる次第であります。それ故、本書に於ては従來の方針を一層進めて、専ら口語について、品詞と活用と文章法中最大切な部分である文の成分の大要を説いて、國語の構造の概要を知らしめることにしました。  
— 總説の部に於ては、國語文法・口語文語の差異等について大體の概念を與へた



外に、品詞分類の基礎として必要な事項を説きました。これによつて從來よりは一層明かに各品詞を識別する事が出来ると信じます。

本書は、また活用に關する知識を徹底させるために、助動詞・助詞の條に於ても、用言との接續について注意をしました。

第三篇に於ては、文の成分の概要を説くと共に、各成分に如何なる語が用ひられるかを述べて、品詞と文章法との聯關を明かにしました。

例文はなるべく平易で既知のものを選びました。

昭和十二年九月

著者識す

# 改訂 新文典 初年級用

## 目次

第一篇 總説	一
第一章 國語と文法	一
第二章 文と單語	三
第三章 主語 述語 修飾語	六
第四章 品詞概説(一)	九
第五章 品詞概説(二)	一一
第二篇 口語の品詞	一六
第六章 名詞	一六



第七章	代名詞	一八
第八章	動詞の活用	二〇
第九章	動詞の活用の種類(一)	二三
第十章	動詞の活用の種類(二)	三〇
第十一章	形容詞の活用と形容動詞	三四
第十二章	用言の音便形	四〇
第十三章	副詞	四三
第十四章	接續詞	四六
第十五章	感動詞	四七
第十六章	助動詞の種類及び活用(一)	四九
第十七章	助動詞の種類及び活用(二)	五五
第十八章	助詞	六一

第三篇 文の成分

第十九章	品詞の轉成	六八
第二十章	複合語	七一
第二十一章	接頭語接尾語	七七
第三篇	文の成分	八一
第二十二章	文と文の成分	八一
第二十三章	主語と述語	八五
第二十四章	修飾語	九一
第二十五章	獨立語	九九
第二十六章	文の成分の位置と省略	一〇四
補充問題		一一六



附 表

- 第一表 五十音圖
- 第二表 口語動詞活用表
- 第三表 口語助動詞活用表
- 第四表 口語形容詞活用表
- 第五表 口語形容詞活用表
- 第六表 口語助動詞接續表
- 第七表 口語助動詞接續表



改 制

# 新 文 典

初年級用

橋 本 進 吉 著

## 第一篇 總 說

### 第一章 國語と文法

〔一〕 言語は國によつて違つてゐる。我々日本人の用ひる言語は**日本語**である。我々は之を**國語**といふ。

〔二〕 日本語には、談話に用ひる言語と、文字で書く時に用ひる特別の言語とがある。談話に用ひる言語を**口語**と云ひ、文字で書く時に用ひる特別の言語を**文語**といふ。

〔三〕 我々は言語によつて、思ふ事を他人に通じるが、言語は、それぞれきまつた意味をもつてゐる一つ一つの言葉によつて、組

日本語  
國語  
口語  
文語



文法

立てられるものである。その組立て方には、一定の法則がある。その法則をはづれては、全く意味を成さないか、又は思ふ事を正しく傳へる事が出来ない。その法則を**文法**といふ。  
〔四〕口語と文語とは、その文法が違つてゐる。勿論一致する所も多いが、違つた所も少くない。

練物言

一

A 次の各段から順々に一つづつ語をとり、それをつゞけて、ことばになるかならぬかを見よ。

鯉が	池の	中を	多い	およぐ
鯉を	池を	中の	ゆるく	およげ
鯉の	池に	中で	麩を	たべる
飛行機が	空を	飛んでゐる		

B 次の語を、いろ／＼の順序につゞけて、その意味の違いを見よ。

C 次の文を口語に直し、文語と口語との差異を考へよ。

- 一 春は花咲き、秋は木の葉落つ。
- 二 御殿の御庭には、下葉の色づきたる萩茂れり。
- 三 萩の御茶屋といふ名のあるも之がためなるべし。
- 四 花は盛りやゝ過ぎて、既に散りたるもあり。
- 五 綿毛に包まれたるひよこども、小さき聲を立てつゝかけめぐる。
- 六 忙しき時に手の足らずといふは、働く人の少きをいふなり。

第二章 文と單語

〔五〕

春が來た。一寸いらつしやい。  
あなたの御宅はどちらですか。

右の諸例のやうに、一つの纏まつた思想を云ひ表はす一つ々の言葉を**文**といふ。文の終では必ずことばが切れる。文

文



單語、語

字で書く時は。を附ける。

〔六〕一つ一つの思想を表はす言葉を單語又は語といふ。文は單語から成立つてゐる。

一つの文を組立ててゐる幾つかの單語は、互に意味上關係があり、すべてが合して、一つの纏まつた思想を表はすものである。

〔七〕

宮島橋立松島を日本三景といふ。

學校の庭にきれいな花がたくさん咲きました。

右の文の「及び」を附けたものは、皆單語で、それ／＼意味をもつてゐる。その中、をとのにがましたは、いつも他の語に附屬し、これと共に用ひられるもので、決してそれだけ切り離して用ひる事はない。宮島橋立松島日本三景いふ學校庭きれいな花たくさん咲きは、他の語に附屬せず、それだけ獨立して

獨立する語  
附屬する語

用ひる事が出来るものである。かやうに、單語には、獨立する語と、常に他の語に附屬する語とがある。

〔八〕

兄も行き、姉も行く。

私は行かないが、お前は行け。

右の例のやうに、「行く」といふ語は、ことばの切れる場合やつゞく場合、いろ／＼の他の語につゞく場合などによつて、「行き」「行く」「行け」「行か」など、語の終の部分變化する。

聲もよく、姿もよい。

天氣さへよければ、行きます。

右のよくよいよければ、よいといふ語の變化した形である。かやうに、いろ／＼の場合に應じて語の形の變化する事を活用といふ。「兄」「姉」「私」「お前」「聲」「姿」「天氣」「も」「は」「さへ」「ば」などは、かやうな變化はない。かやうに、單語には、活用のある語と、

活 用  
活用のある語  
活用のない語



活用の無い語とがある。

練習題 二

次の文の單語に活用があるか無いかを考へよ。

- 一 馬 は 大そう 元氣 の よい 動物 で あり ます。
- 二 鳥 は ふくろふ を 見る と、 太い くちばし で つゞき ます。
- 三 島 の 人 は 「日 は 海 から 出 て 海 へ はいる もの だ」と 申し ます。
- 四 今年 の 春、 二匹 の 山羊 が 生ま れ まし た が、 もう 乳 を 飲 み ませ ぬ。
- 五 大蛇 は 酒桶 を 見つけ、 八つ の 頭 を 八つ の 桶 に 入 れ て、 がぶがぶと 飲 み まし た。

第三章 主語 述語 修飾語

〔九〕

鳥が飛ぶ。 水は冷い。  
私は學生です。

右の文に於て、「飛ぶ」「冷い」「學生です」は、鳥が、どうするか、水が、どんなであるか、「私が、何であるか」を述べるもので、之を述語といふ。「鳥が」「水は」「私は」は、「何が飛ぶか」「何が冷いか」「何が學生であるか」を示すもので、之を主語といふ。すべて、文の中で、「何がどうするか」「何がどんなだ」「何が何だ」といふ關係にある語の中、「何が」に當るものを主語と云ひ、どうする「どんなだ」「何だ」を示すものを述語といふ。

〔10〕 白い花が見事に咲いた。

右の文において、「白い」は「花」に附いて、その花がどんな花であるかを定め、「見事には」は「咲いた」に附いて、その咲きやうがどんなであるかを定める。かやうに、他の語に附いて、その意味をくは

主語 述語



修飾する  
修飾語

しく定める事を修飾するといふ。「白い」「見事に」は、「花」「咲いた」を修飾する語である。之を修飾語といふ。

練習問題 三

A 次の文から主語と述語とを見出せ。

- 一 佐藤さんも登山する。
  - 二 あそこはあぶない。
  - 三 それは地理書です。
  - 四 弟が泣いて居る。
  - 五 われわれは日本人だ。
  - 六 鶏が鳴きましたか。
  - 七 運動場は暖かです。
  - 八 どなたかいらつしやいました。
- B 次の文の中の修飾語を挙げよ。

- 一 立派な建物が見える。
- 二 小さい鳥はかはい。
- 三 自動車は静かに動き出した。
- 四 涼しい風がそよ／＼と吹く。
- 五 昨日からの雨はすっかりやみました。
- 六 近所の子供等が嬉しさうに遊んでゐる。
- 七 こちらの高い山は常陸の筑波山です。

第四章 品詞概説(一)

品詞

〔一〕單語を文法上の性質の違ひによつて、幾つかに分け、その一つ一つを品詞と呼ぶ。本書では、次の九品詞に分ける。

名詞	代名詞	動詞	形容詞	副詞
接續詞	感動詞	助動詞	助詞	
〔三〕	(甲) 花	建物	東京	西郷隆盛



名詞

代名詞

體言  
體言は主語となる。  
體言には活用がなす。

動詞

形容詞

用言  
用言は述語となる。  
用言には活用がある。

(乙) 私 これ そこ あちら

(甲)の諸語は、事物の名や地名・人名を表はす語である。之を名詞といふ。(乙)の諸語は、事物の名をいふ代りに、それ等を直接に指していふ語である。之を代名詞といふ。

名詞・代名詞は、主語になることの出来るものである。之を總稱して體言といふ。體言には活用が無い。

〔III〕 (甲) 螢が飛ぶ。 蛇が居る。

(乙) 鐵は堅い。 これは美しい。

(甲)の「飛ぶ」「居る」は、事物の動作存在を述べる(敘述する)語である。かやうなものを動詞といふ。(乙)の「堅い」「美しい」は、事物の性質有様を述べる(敘述する)語である。かやうな語を形容詞といふ。

動詞・形容詞は、それだけで述語となることの出来るもので

ある。

ある。之を總稱して用言といふ。用言には活用がある。

練習題 四

次の文の傍線をつけた語の品詞をいへ。

- 一 燕の飛ぶのは、矢よりも早い。
- 二 あそこに形かたちの面白おもしろい島が見える。
- 三 お前の國はどこか。又親の名は何といふ。
- 四 私は今日から日記をつける約束をした。
- 五 それはどなたの帽子ですか。ずるぶん大きいのですね。
- 六 若い男がわざと手から斧きりぎりすを放すと、斧はどぶんと池へ落ちました。
- 七 兄は負けてもよいからしまひまで走れと申しました。

第五章 品詞概説(二)



副詞  
副詞は主語にな  
ることが無い。

接續詞  
接續詞は主語、  
述語、修飾語い  
づれにもならな  
い。

感動詞  
感動詞は言ひき

〔一四〕 山の頂上が、はつきり見える。

今朝も、かなり寒い。

右の「はつきり」「かなり」は、下の「見える」「寒い」を修飾する語である。このやうに、動詞・形容詞を修飾する語を副詞といふ。副詞は主語になることは無い。

〔一五〕 あれは海だらうか、それとも湖だらうか。

それは私も讀んだ。併し面白い本ではない。

右の「それとも」「併し」のやうに、前のことばの意味を受けて後のことばに續ける語を接續詞といふ。接續詞は、主語にも述語にも修飾語にもならない。

〔一六〕 あゝ、こまつた事だ。

はい、さうです。

右の「あゝ」「はい」のやうに、感動の情を表はす語や、應答の語を、感

りになる。主語、  
述語、修飾語い  
づれにもならな  
い。

動詞といふ。感動詞は、それだけで言ひきりになる事が出来る語である。主語にも述語にも修飾語にもならない。

〔一七〕 (甲) 出る杭は打たれる。昨日雷が落ちた。

(乙) これは日本の地圖だ。

(甲)の「打たれる」「れる」は、「打つ」といふ動詞に附いて、「杭が」「打つ」といふ動作を受ける事を表はし、「落ちた」の「た」は、「落ちる」といふ動詞に附いて、「落ちる」といふ作用が、今より前に起つた事を示す。(乙)の「地圖だ」の「だ」は、地圖といふ名詞に附いて、何であるかを述べ説明して、之を述語とする。かやうに、動詞に付き、之にいろいろの意味を加へて、敘述を助け、又は他の語に附いて、之に敘述する意味を加へる語を助動詞といふ。助動詞には活用がある。

〔一八〕 (甲) 庭の菊も、白い花びらに赤みがさして來た。

2010



助詞  
助詞には活用が  
無い。  
助詞、助動詞は  
附屬する語であ  
る。

(乙) 源氏の者どもは、義經をかばひました。  
その語と他の語との關係を示し、又は之に或意味を添へる語を助詞といふ。助詞には活用が無い。  
助詞と助動詞とは、いつも他の語に附いて現れるもので、決して單獨には用ひられない。即ち附屬する語である。その他の品詞は、すべて獨立する語である。

練習題 五

- A 次の文の傍線を附けた語の品詞をいへ。
- 一 私はなるたけ道のよいところを歩きました。
  - 二 まあ、あなたはどなたですか。
  - 三 弾丸はをり／＼足下に落ちる。けれども將軍は少しも驚く色がない。

四 やあ、また月が隠れた。もう戸をしめよう。

五 途中で雨に降りましたが、しかしちきやみましたので、あまり濡れません。

B 次の文の一つ一つの單語の品詞をいへ。

一 さあ、出かけよう。後れると困るから急がう。

二 螢來い。あつちの水はにがいぞ。こつちの水はあまいぞ。

三 兎はすぐ海の水をあびました。すると痛みが一そうひどくなりました。

四 弟は病氣で、昨日も御飯を食べない。

五 美しい緑の葉は、さら／＼と音を立ててゐます。



第二篇 口語の品詞

第六章 名詞

名詞

〔一九〕

名詞は、事物の名を表はす語をいふ。

源頼朝 西郷隆盛 東郷元帥 ワシントン

東京市 長野縣 鎌倉

富士山 信濃川 琵琶湖

犬 孔雀 梅 菊 金剛石 机 家 機械 ペン

心 勇氣 正直 衛生 時間 忍耐 勉強

これ等はすべて名詞である。

○名詞は體言の一種である。即ち活用が無く、主語になる事が出来る。

〔二〇〕 名詞のうち、數を表はす語や、數によつて順序を表はす語を、特に數詞といふことがある。

數詞

ひとつ 二箇 三人 四羽 五ダース

いくつ いく人

第一 二號 三つめ (午前)四時

六

次の文から名詞をぬき出せ。

一 五時に起きて外に出ると、呉服屋の小僧が表を掃いてゐた。

二 島を出て六日ばかりたつと、陸のかけはちつとも見えない。

三 コロンブスは上陸すると、喜んで土地の上に坐つた。涙が頬を傳はつて流れた。

四 昨日までに米俵の山が二つ出来て、もう三つ目の山が出来かかつてゐます。

五 平維盛は十萬騎を引きつれて、越中の國の礪波山に陣を取りました。



代名詞

人代名詞

指示代名詞

### 第七章 代名詞

〔三〕代名詞は、事物の名をいふ代りに、それ等を直接に指していふ語である。

○代名詞は體言の一種である。即ち活用が無く、主語になる事が出来る。

〔三〕代名詞のうち、人を指していふ語を人代名詞といひ、人以外の事物場處方角を指していふ語を指示代名詞といふ。人代名詞の主なもの、は、次の通りである。

わたくし わたし 僕	あなた おまへ 君	このかた	そのかた	あのかた	どのかた どなた だれ
------------------	-----------------	------	------	------	-------------------

指示代名詞は次の通りである。

方角	場處	事物	この その あの どの わが
こち ちち らち	こ こ こ	こ れ そ れ あ れ な ど に れ	
そち ちち らち	そ こ こ		
あち ちち らち	あ そ こ		
どち ちち らち	ど こ こ		

#### 練習題 七

次の文から代名詞をぬき出し、かつその種類をいへ。

- 一 あつちを見ても、こつちを見ても、どつちへ向いても、山ばかりでした。
- 二 そこにこのかたのステッキがありませんか。
- 三 「だれだい、今笑つたのは。」私です。蟻です。
- 四 君、ちよつと待つて下さい。僕も今そこへ行きます。
- 五 これもいけない、それもいけないとすれば、何がいふだらう。
- 六 ここがあなたの教室です。席はあれにきめます。



動詞

七 あなたはどなたでいらつしやいますか。

第八章 動詞の活用

〔三〕動詞は事物の動作や存在を述べる語である。

行く。歸る。飛ぶ。取る。立つ。建てる。読む。

書く。思ふ。知る。勉強する。心配する。

有る。居る。居る。

これ等は皆動詞である。

○動詞は用言の一種である。即ち活用があり、それだけで述語となる事が出来る。

〔四〕動詞には活用がある。即ち動詞は、用ひ方によつて、その形が變る。今「読む」について見れば、次の通りである。

- (一) 本を讀まない。
- (二) 本を讀みます。

口語動詞の活用

(三) 本を讀む。

(四) 本を讀む時。

(五) 本を讀めば物しりになる。

(六) 早く本を讀め。

右の「讀」のやうに、變化せぬ部分を語幹といひ、「ま」「み」「む」「め」のやうに、變化する部分を語尾といふ。

〔五〕未然形 前項の例(一)の「讀ま」は、打消の意味の「ない」に連る形である。これはまた「ぬ」「う」(動詞によつては「よう」などにも)連つて、動作がまださうなつてゐない意を表はす。之を未然形といふ。

連用形

(二)の「讀み」は、「ます」に連る形である。これは、また「讀み出す」「讀みかける」など、他の用言に連る時にも用ひる形である。之を連用形といふ。

語幹  
語尾

口語動詞の活用形

未然形

連用形



終止形  
連體形  
假定形  
命令形

**終止形** (三)の「讀む」は、言ひ切る時に用ひる形である。之を終止形といふ。終止形は、用言の本體である。

**連體形** (四)の「讀む」は、體言に連る形である。之を連體形といふ。

**假定形** (五)の「讀め」は、「ば」に連つて、假定を表はす時に用ひる形である。之を假定形といふ。

**命令形** (六)の「讀め」は、命令に用ひる形である。之を命令形といふ。

以上の未然形・連用形・終止形・連體形・假定形・命令形のおのの活用形といふ。

**練習題** 八

A 傍線を附けた動詞を、語幹、語尾にわけよ。

- 一 明日から學校が始まります。また一緒に行きませう。

二 私が「福は内、鬼は外」と叫びながら豆をまくと、妹と弟がそれを拾ひました。

三 龜は少しも休まないで走りまわしたので、終に兎に勝ちました。

B 次の各動詞のすべての活用形を考へて見よ。

- 書く 押す 漕ぐ 打つ 死ぬ 問ふ 飛ぶ 積む 取る

第九章 動詞の活用の種類(一)

口語動詞の活用の種類

(二六) 動詞の活用には五つの違つた種類がある。即ち、

四段活用 上一段活用 下一段活用

カ行變格活用 サ行變格活用

(二七) 四段活用 「書く」といふ動詞の各活用形は

細字は書かない。(未然形)  
細字を書きます。(連用形)



四段活用

細字を書く。  
 (終止形)  
 細字を書く時。  
 (連體形)  
 細字を書けば目がつかれる。  
 (假定形)  
 時々細字も書け。  
 (命令形)

即ち語尾が かきくけけ となつて、五十音圖の アイウエ の四つの段に變化する。このやうな活用を **四段活用** といふ。

○四段活用の動詞は カガサタナハバマラ の各行にある。

行	か	が	さ	た	な
語幹	書	漕	押	打	死
語尾	か	が	さ	た	な
未然	か	が	さ	た	な
連用	き	ぎ	し	ち	に
終止	く	ぐ	す	つ	ぬ
連體	く	ぐ	す	つ	ぬ
假定	け	げ	せ	て	ね
命令	け	げ	せ	て	ね

〔三〕上一段活用

「起きる」といふ動詞の各活用形は

は	ほ	ま	ら
買	呼	踏	降
は	ば	ま	ら
ひ	び	み	り
ふ	ぶ	む	る
ふ	ぶ	む	る
へ	べ	め	れ
へ	べ	め	れ

弟はまだ起きない。  
 (未然形)  
 六時には起きます。  
 (連用形)  
 毎朝六時に起きます。  
 (終止形)  
 起きる時。  
 (連體形)  
 五時に起きればよからう。  
 (假定形)  
 遅くとも七時には起きよ(起きろ)。  
 (命令形)

即ち語尾は きききるきるきれきよ(きろ) となり、五十音圖の イ



上一段活用

の段の音と、それになるれよ(ろ)の附いたものとである。このやうな活用を上一段活用といふ。

○上一段活用の動詞は、カガガザ・タダナ・ハバ・マヤ・ラ・ワの各行にある。

行	か	が	ざ	た	だ	な	は	ば
語幹	起	過	案	落	恥	(似)	強	綻
語尾	起	過	案	落	恥	(似)	強	綻
未然	き	ぎ	じ	ち	ぢ	に	ひ	び
連用	き	ぎ	じ	ち	ぢ	に	ひ	び
終止	きる	ぎる	じる	ちる	ぢる	にる	ひる	びる
連體	きる	ぎる	じる	ちる	ぢる	にる	ひる	びる
假定	きれ	ぎれ	じれ	ちれ	ぢれ	にれ	ひれ	びれ
命令	きよ	ぎよ	じよ	ちよ	ぢよ	によ	ひよ	びよ

ま	や	ら	わ
(見)	悔	懲	(居)
み	い	り	る
み	い	り	る
みる	いる	りる	るる
みる	いる	りる	るる
みれ	いれ	りれ	るれ
みみ	い	り	る
みよ	いよ	りよ	るよ

○動詞の中には、語幹語尾の區別のつかぬものがある。表の語幹の例に(一)を附けたのは、それである。以下の表もこれと同じである。  
○ヤ行上一段活用の動詞は、「射る」「鑄る」「報いる」「悔いる」「老いる」などである。ワ行上一段の動詞は「居る」「率ゐる」などである。

〔二五〕下一段活用 「考へる」といふ動詞の各活用形は

- まだ何も考へない。(未然形)
- 私もよく考へます。(連用形)
- つくづくと考へる。(終止形)
- 何かを考へる時。(連體形)



下一段活用

考へればわかることだ。 (假定形)  
落ちついて考へよ(考へろ)。(命令形)

即ち語尾は、へ・へる・へる・へれ・へよ(へろ)となり、五十音圖の工の段の音と、それにるれよ(ろ)の附いたものである。このやうな活用を下一段活用といふ。

○下一段活用の動詞は、五十音圖の各行とガザダバの各行とにある。

た	ざ	さ	が	か	あ	行
捨 <small>す</small>	混 <small>ま</small>	寄 <small>よ</small>	投 <small>な</small>	受 <small>う</small>	(得)	語幹 語尾
て	せ	せ	げ	け	え	未然
て	せ	せ	げ	け	え	連用
てる	せる	せる	げる	ける	える	終止
てる	せる	せる	げる	ける	える	連體
てれ	せれ	せれ	げれ	けれ	えれ	假定
てろよ	せろよ	せろよ	げろよ	けろよ	えろよ	命令

練習題 九

次の動詞の活用の種類をいへ。

わ	ら	や	ま	ぼ	は	な	だ
植 <small>う</small>	流 <small>なが</small>	越 <small>こ</small>	攻 <small>せ</small>	浮 <small>うか</small>	考 <small>かんが</small>	尋 <small>たず</small>	撫 <small>な</small>
ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で
ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で
ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる
ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる
ゑれ	れれ	えれ	めれ	べれ	へれ	ねれ	でれ
ゑろよ	れろよ	えろよ	めろよ	べろよ	へろよ	ねろよ	でろよ

○ア行下一段活用の動詞は「得る」「心得る」だけである。

○ワ行下一段活用の動詞は「植える」「餓える」「握る」などである。



働く<sub>4</sub> 勝つ<sub>4</sub> 養ふ<sub>4</sub> 延びる<sub>4</sub> 述べる<sub>1</sub>  
 老いる<sub>1</sub> 祈る<sub>4</sub> 盡きる<sub>1</sub> 争ふ<sub>4</sub> 返す<sub>4</sub>  
 負ける<sub>1</sub> 植ゑる<sub>1</sub> 住む<sub>4</sub> 有る<sub>4</sub> 似る<sub>1</sub>  
 居る<sub>1</sub> 飲む<sub>4</sub> 居る<sub>4</sub> 喜ぶ<sub>4</sub> 數へる<sub>1</sub>  
 聞える<sub>1</sub> 聞く<sub>4</sub> 見る<sub>1</sub> 見える<sub>1</sub> 見せる<sub>1</sub>

第十章 動詞の活用の種類(二)

〔三〕カ行變格活用 「來る」といふ動詞の活用形は

まだ誰もこない。(未然形)  
 今日の會には、井上もきます。(連用形)  
 佐藤もくる。(終止形)  
 此處へくる時。(連體形)  
 此處へくればよいのに。(假定形)

カ行變格活用

此處へこい。(命令形)  
 右の「來る」の活用を、カ行變格活用略稱カ變」といふ。

未 然	連 用	終 止	連 體	假 定	命 令
こ	き	くる	くる	くれ	こい

○カ變に屬する動詞は、「來る」だけである。

〔三〕サ行變格活用 「爲る」といふ動詞の各活用形は

何もしない(せぬ)。(未然形)  
 何でもします。(連用形)  
 私もさうする。(終止形)  
 何かをする時。(連體形)  
 さうすればよい。(假定形)  
 早くせよ(しろ)。(命令形)



サ行變格活用

右の「する」の活用を、サ行變格活用略稱「サ變」といふ。

未然	連用	終止	連體	假定	命令
せし	し	する	する	すれ	せしよろ

○サ變に屬する動詞は「する」だけであるが漢語や外國語を動詞にするにはこの活用にすることが多い。その際サ行になるものもある。

勉強する

運動する

キャッチする

スケッチする

命ずる

信ずる

○「重んずる」「輕んずる」等は、サ變に用ひるのが普通であるが又上一段活用にも用ひる。

練習題 一〇

A 次の動詞の活用の種類をいへ。

旅行する

安んずる

案じる

感ずる

譯す

重んじる

バスする

略す

B 傍線を附けた動詞の活用の種類をいへ。

一 青空たかくそびえ立ち、からだに雪の着物着て、霞の裾を遠く

引く、富士は日本一の山。

二 屋島の合戦に、義経は小わきにはさんでゐた弓を海へ落しま

した。弓は潮に引かれて流れて行きます。義経は馬の上

三 正成は何時の間に用意して置いたか、松明を出して、之に火を

つけて、橋の上に投げさせた。

四 弱い者をいぢめるのは、男らしくないと思ひます。

五 燕は田や島の作物につく蟲を取つてたべますから、人の役に

立つ鳥です。

C 次の文に誤があつたら正せ。



- 一 絶へず努力している様だが、さつぱり成績があがらない。
- 二 目を閉じてこの詩を讀んで御覽なさい。
- 三 考えて見ると、今強いて行くには及ばない。
- 四 たくさんの苗を植えたが、育つたのは數える程しかありません。
- 五 いやよく大恩に報ひる時が來た。

第十一章 形容詞の活用と形容動詞

形容詞

〔三〕形容詞は事物の性質有様を述べる語である。

高い。 堅い。 早い。 新しい。 涼しい。  
 面白い。 小さい。 長い。 軽い。

これ等は形容詞である。

○形容詞は用言の一種である。即ち活用があり、それだけで述語となるが事出来る。

形容詞の活用

〔三〕形容詞は次のやうに活用する。

(一) 道がだんく高くなる。 門が新しく見える。

(二) あの山はよほど高い。 これは新しい。

(三) 高い山に登る。 新しい帽子を買ふ。

(四) あまり高ければ登れまい。 新しければ買はう。

右の「たか」「高」「あたらし」「新」のやうに變化せぬ部分を語幹といひ、「く」「い」「けれ」のやうに變化する部分を語尾といふ。

〔三〕連用形 前項の例(一)の「高く」「新しく」は「高くなる」「新しく見える」など、他の用言に連る時に用ひる形である。之を連用形といふ。

終止形 (二)の「高い」「新しい」は、言ひ切る時に用ひる形である。之を終止形といふ。

連體形 (三)の「高い」「新しい」は、體言に連る時に用ひる形で

語幹  
語尾

形容詞の活用形

連用形

終止形

連體形



假定形

シク活用  
ク活用

ある。之を連體形といふ。

假定形 (四)の「高けれ」「新しけれ」は、「ば」に連つて、假定を表はす時に用ひる形である。之を假定形といふ。

連用形終止形連體形假定形のおのくを活用形といふ。

新し <small>あたらし</small>	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
	高 <small>たか</small>							
				く				
					い			
						い		
							けれ	

○形容詞の活用形には未然形と命令形とがない。

○形容詞の活用は一種である。しかし場合によつては「新しい」のやうに語幹の末に「し」のあるのをシク活用といひ「高い」のやうに「し」のないのをク活用と稱して二種とする事もある。

〔三〕形容詞と同じ性質の語で、次の様に活用するものがある。

形容動詞

之を形容動詞といひ、特別な形容詞と見る。

種二第	種一第	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
立派	静か	暑 <small>あつ</small>	嬉し						

未然形は助動詞「う」に連る形である。

暑嬉しからう。 静か立派だらう。

連用形は助動詞「た」に連る形である。

暑嬉しかつた。 静か立派だつた。

假定形は助詞「ば」に連つて假定の意を表はす形である。但

し、この「ば」は無いこともある。

庭が静かならば行つて見よう。



態度さへ立派ならば非難はおこるまい。  
第二種の形容動詞は、丁寧と言ふ場合には次のやうに活用する。

語尾	語幹	未然	連用	終止	連體	假定	命令
	立派	静か	でせ(ウ)	でし(タ)	です		

練習題 一一

- A 次の文から形容動詞・形容動詞をぬき出し、その種類をいへ。
- 一 波が穏かならば船で行つてもよい。
  - 二 そんなに風が強くては、ずるぶん心細かつたでせう。
  - 三 今朝は大そう寒い。屋根の上は霜でまっ白だ。
  - 四 話があまりくどいので、いやでした。
  - 五 こんなに閑静な所で暮したら、さびしく思ふ事もあるだらう。

- B 次の文に誤があつたら正せ。
- 一 着物が長かろうが、短かろうが、平氣でゐる。
  - 二 一生のうちには、つらひ事もあるし、楽しい事もあるらうさ。
  - 三 缺席者があつても、僅かだらう。
  - 四 身體さへ丈夫なれば、結局成功するよ。
  - 五 どうです此の花は、きれいでしよ。
  - 六 社長は有名だつた人だけに、生活も大變はででした。
  - 七 自分さへ正しければ、一時悪く思はれても、やがて潔白な事がわかるだらう。
  - 八 そんなに面白ければ、見物人も多いでせう。
  - 九 それは弓が惜しかつたのではない。この弱い弓を取られては源氏の名折れになるからだ。

- 一 着物が長かろうが、短かろうが、平氣でゐる。
- 二 一生のうちには、つらひ事もあるし、楽しい事もあるらうさ。
- 三 缺席者があつても、僅かだらう。
- 四 身體さへ丈夫なれば、結局成功するよ。
- 五 どうです此の花は、きれいでしよ。



動詞の音便形

第十二章 用言の音便形

〔三〕動詞から「て」「た」に連る場合には、連用形から連るのであるが、サ行以外の四段活用は、普通の活用形とは違つた形から連る。これを動詞の音便形といふ。動詞の音便形には、語尾がイとなるもの、ウとなるもの、ンとなるもの、促音となるものの四種がある。

○音便が起ると、右の「て」「た」は、「で」「だ」と變ることがある。また「たら」「たりの場合も、た」と同様である。

一、語尾がイになるもの(イ音便形) カ行四段ガ行四段

(ガ行の時は「て」「た」は「で」「だ」となる。)

聞いて(た) カ行

騒いで(だ) ガ行

ウ音便形

二、語尾がウになるもの(ウ音便形) ハ行四段

沿うて(た) 祝うて(た)

撥音便形

三、語尾がンになるもの(撥音便形) ナ行四段バ行四段

マ行四段「て」「た」が「で」「だ」となる。

死んで(だ) ナ行

飛んで(だ) バ行

踏んで(だ) マ行

促音便形

四、語尾が促音になるもの(促音便形) タ行四段ハ行四

段ラ行四段

打つて(た) タ行

買つて(た) ハ行

張つて(た) ラ行

○ハ行四段は促音にもなり、又ウにもなるのである。



形容詞のウ音便形

〔三〕形容詞の連用形が、「ござり(い)ます」「存じます」に連る時は、その語尾の「が」になる。之を形容詞のウ音便形といふ。  
お早うございます。 嬉しう存じます。

練習問題 一一

- A 次の文から音便形をぬき出し、かつ何行の活用であるかをいへ。
- 一 勇んで進め。進んだら退くな。
  - 二 大國主命が出雲の海岸を歩いていらつしやると、波の上は何か小さい物が浮んでこつちへ近寄つて來ました。
  - 三 おたまじやくしが長い尾をふつて元氣よく泳いでゐます。
  - 四 伯父さんに時計を買つていたけれど、ようございましたね。
  - 五 矢はあたつて居ませんのに、狐は死んで居ます。
- B 次の文に誤があつたら正せ。
- 一 朝日がばつとガラス戸に輝ひた。

- 二 七度轉むで八度起きる元氣が必要です。
- 三 道に迷ふて反對の方向に進むで居た。
- 四 有りがとふございます。この御恩は死むでも忘れません。
- 五 お恥しゆうございますが、これが私の描ひた繪です。
- 六 流れに沿ふて下ると、右に高い山がそびへてゐる。
- 七 いくら上手に歌ふても、耳を傾けて聞ひてくれる者がなかつた。

第十三章 副詞

副詞

〔三八〕副詞は、動詞や形容詞を修飾する語である。

文章をこまかに見る。 外は大層寒い。  
肉はごく柔かだ。柔かです。  
右の「こまかに」「大層」「ごく」等は副詞である。  
○副詞には活用がなく、又主語になることがない。



〔五〕 副詞は、また他の副詞を修飾することがある。

もつとゆつくり歩け。

よほどはつきり見える。

すこし穩かになつた。

大變親切に世話する。

〔四〕 副詞と修飾される語との間に、他の語が入ることがある。

小石がころ／＼と谷底にころがる。

やはりこちらがよい。

多分弟も参りませう。

○副詞には語の終りに「と」「の」のついたものが多い。

靜かに

確かに

こまかに

柔かに

たひらに

まれに

ずなほに

自然に

立派に

急に

ひらりと

するりと

ころ／＼と

ばた／＼と

○右のやうな「に」で終る副詞の「に」を除いたものを語幹として、第二種の形容動

詞が出来ることが多い。(靜かだ「確かだ」こまかだなど)

練習題 一三

次の文から副詞をぬき出し、かつその修飾する語を示せ。

一 味方は、さん／＼に敵を切りまくつた。

二 はるかに退いた敵は、また押寄せて來た。

三 印度の國は、たいそう暑うございます。

四 あれは、ふだんはごく大人しいが、怒ると非常にこはい人です。

五 かなり詳しく見たが、やはり見落しがあつた。

六 あんなに丈夫な人が、そんなに弱つたんですか。

七 もつとゆつくりと御讀みなさい。

八 しと／＼と降る雨の中を、とぼ／＼と歩いて來る人がありま

す。

九 右の方にかすかに見えるのは、私の村の灯です。



接續詞

一〇 こんなにひどい雨は、めつたに無いものです。

第十四章 接續詞

〔四〕接續詞は、前のことばの意味を受けて、後のことばに續ける語である。

それは私も知つてゐる。しかし人にはいはなかつた。

道はかなり遠い。けれども時間は多くかからない。

藤原は英語も出來、そのうへドイツ語もうまい。

私は庭球も下手だし、また籠球も上手でない。

東京及び大阪は我が國の二大都市である。

○接續詞には活用がなく、主語にも述語にも修飾語にもならない。

練習題

一四

感動詞

次の文から接續詞をぬき出せ。

- 一 それでも宜しい。だが少し面白くない所があるやうだ。
- 二 雨は降るまいが、でも用意に傘を持つて行くがいい。
- 三 夜中にふと目がさめた。すると枕もとに蟲の音がする。
- 四 徳育知育並びに體育は、常に並行しなければならぬ。
- 五 午後の會には私も出席します。尤も少し後れるかも知れません。

第十五章 感動詞

〔四〕感動詞は、感動の情を表はす語や、應答に用ひる語である。

あ、さうだった。

おお、熱い。

おい、待て。

もしく、佐藤さん。

はい、わかりました。

ええ、参ります。

「あなたは御存じですか。」

「いえ、ええ。」



右の「あ」「おお」「おい」「もしく」「はい」「えゝ」「いゝえ」等は皆感動詞である。

○感動詞には活用が無い。主語にも述語にも修飾語にもならない。それだけで言ひ切りになることが出来る。文の首はじめに来るのが普通である。

練習題 一五

次の文から感動詞をぬき出せ。

- 一 あら、お珍しい。佐藤さんですか。
- 二 えゝ、残念だ。また失敗か。
- 三 おや、また風が吹いて来た。
- 四 「さあ、出かけようぢやありませんか。」はい。
- 五 いや、これでたくさんです。
- 六 こら、何をするか。そんな事をしてはいけない。
- 七 まあ、かはいゝお子さんですこと。

八 やあ、皆さん、御苦勞ですわね。

第十六章 助動詞の種類及び活用(二)

助動詞

〔三〕助動詞は動詞に附いて、その敘述を助け、又は體言その他の語に附いて、敘述する意味を加へるものである。

○助動詞は附屬する語であつて活用がある。

〔四〕助動詞は又他の助動詞に附いて、幾つも重なることがある。

鉛筆が折れました。

鉛筆は折れませんでした。

〔五〕助動詞には活用がある。その活用のしかたは、動詞と同じもの、形容詞と同じもの(共に或活用形を缺くものがある)及び特殊なものがある。又、全く語形の變らぬものもある。

〔六〕助動詞は、その表はす意味から、これを次の九種に分ける。

助動詞には活用がある。

助動詞の種類



受身の助動詞

受身 可能 使役 打消 過去及び完了  
 推量 希望 敬讓 指定

〔四〕 受身の助動詞 れる られる  
 人に笑はれる。 主人に譽められる。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ
られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られよ

下二段活用  
 下二段活用

「れる」は動詞四段活用の未然形に「られる」はその他の活用の未然形に附く。「られる」がサ變の動詞に附くと、「せられる」となるが、「いいやうにされる」「噂される」「侮辱される」のやうに、「される」となることもある。

可能の助動詞

〔四〕 可能の助動詞 れる られる  
 足袋は夏でもはかれる。 どこでも見られる。

使役の助動詞

可能の「れる」「られる」の活用のしかた及び動詞への付き方は、受身の「れる」「られる」と同じである。但し、可能には命令形がない。

〔四〕 使役の助動詞 せる させる  
 面白い話を聞かせる。 入學試験を受けさせる。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ

下二段活用  
 下二段活用

「せる」は動詞四段活用の未然形に「させる」は上一段下一段力變の未然形に附く。サ變には、その未然形「せ」に「させる」が附いて、「せさせる」となるべきであるが、普通「念入りにさせる」「練習させる」のやうに、「させる」といふ。



打消の助動詞

〔吾〕 打消の助動詞

ない ぬん

月はまだ昇らない。この事は誰も知らぬん。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ぬ		なく	ない	ない	なければ	
		ず	ぬん	ぬん	ね	

ク活用  
特殊活用

「ない」「ぬ」は、各活用の動詞の未然形に附く。但し、サ變の動詞には、「しない」「せぬ」のやうに、「ない」「は」「し」「ぬ」は「せ」に限つて附く。

又「ない」「ぬ」は、四段活用の「有る」には附かない。

△○なくとあると合して一語になつて次のやうに用ひられる。

知らなからう。 知らなかつた。

〔五〕 過去及び完了の助動詞

ただ

昨夜は十時に寝た。 授業は今済んだ。

過去及び完了の助動詞

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
た	たら(ウ)		た	た	たら(バ)	

特殊活用

「た」はすべての動詞及び形容動詞の連用形に附く。但し、サ行以外の四段の動詞には音便形に付き、その場合に「た」「が」「た」となる場合があることは、すでに述べた。

○「た」の假定形「たら」は、そのままでも「たらば」の意味に用ひられる。

特殊活用の種類 一六

傍線を附けた助動詞の種類をいへ。

- 一 蒔かぬ種は生えぬ。
- 二 私も五時が打つたら歸られるだらう。
- 三 一度にどつとときの聲をあげさせた。
- 四 たとひ金銀で作つた弓でも、御命には代へられませぬ。



- 五 そんな事を言はれては、誰だつてだまつて居られないさ。
- 六 洋服は着なれなかつたので、はじめは困つた。
- 七 薬を飲ませ、粥を食べさせると、やがて元氣になつた。
- 八 もらひ泣きをせぬ者は、ありませんでした。
- 九 通有も左の肩を射られたが、少しも屈せずに進んだ。
- 一〇 自ら蒔いた種ならば、自ら刈らねばならぬ。

推量の助動詞

〔五〕 推量の助動詞 らしい う よう まい

第十七章 助動詞の種類及び活用(二)

あれは學校らしい。 間もなく卒業するらしい。  
 それがよからう。 弟が知つて居ようと思ふ。  
 その話は誰も知るまい。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
---	----	----	----	----	----	----

らしい	らしく	らしい	らしい			
う	う	う	(う)			
よう	よう	よう	(よう)			
まい	まい	(まい)				

シク活用  
 變化せず  
 變化せず  
 變化せず

「らしい」は「であるやうだ」の意味で體言に付き、之に敘述の意味を加へる。又「佐藤も休むらしい」「問題はやさしいらしい」のやうに、「やうだ」の意味で用言にも附く。

○「らしく」が「ございます」「存じます」に連る時は形容詞と同じく、「らしく」となる。  
 ○「らしく」と「ある」と合して一語となつたものは「誰か居るらしくかつた」のやうに用ひる。

「う」は動詞四段活用及び形容動詞の未然形に、「よう」はその他の活用の未然形に附く。但し、サ變には、「し」に附いて、「せ」には附かない。



希望の助動詞

「まい」は、推量と打消との意をかねた助動詞である。動詞の四段活用には、その終止形に、上一段下一段、力變には、その未然形に、サ變には、その未然形の「し」に附く、

〔五〕希望の助動詞 たい たがる

私はもううちへ歸りたい。 弟もうちへ歸りたがる。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
たい		たく	たい	たい	たけれ	
たがる	たがら	たがり	たがる	たがる	たがれ	

夕活用  
四段活用

「たい」はすべての動詞の連用形に附く。

○「たく」が「ございます」「存じます」に連る時は、「たう」となる。

○「たく」と「ある」と合して一語となつたものは、次のやうに用ひられる。

おまへも聞きたからう。 私も見たかつた。

「たがる」はすべての動詞の連用形に附き、他が希望する意味

敬讓の助動詞

に用ひられる。

〔五〕敬讓の助動詞 れる られる ます

先生も時々そんなことを話される。

あのかたは毎朝六時に起きられる。

新聞はここにあります。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ます	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ

特殊活用

敬讓の「れる」「られる」は活用のしかたも、動詞への附き方も、受身の「れる」「られる」と同じである。但し、命令形は用ひない。「ます」は動詞の連用形に附く、但し、その命令形「ませ」「まし」は敬讓の意を含まぬ動詞には附かぬ。

○「ます」の終止形連體形に「まする」を用ひることがある。



右の外、動詞の「下さる」「なさる」「遊ばす」「申す」「致す」や「になる」を、敬讓の助動詞のやうに用ひる。

あのかたもお出で下さる。(なさる。遊ばす。になる。)

お呼び申す。(致す。)

指定の助動詞

〔五〕 指定の助動詞 だ です

西郷隆盛は英雄だ。 これは私の本です。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
だ	だら(ウ)	だつ(タ)	だ	(な)	なら(バ)	
です	でせ(ウ)	でし(タ)	です			

特殊活用

特殊活用

「だ」「です」は、體言や助動詞「の」に附く。但し、その未然形に助動詞「う」の附いたもの、及び「なら」は、「行くだらう」「白いでせう」「行くなら」「白いなら」のやうに、動詞形容詞の終止形にも附く。

○「だ」の假定形「なら」はそのまゝでも「ならば」の意味に用ひられる。

練習題 一七

A 傍線をつけた助動詞の種類をいへ。

- 一 叔父さんは、これでもよいと言はれた。
- 二 鮭は多く川で死んでしまふらしい。
- 三 虎は、どうすることも出来ませんでした。
- 四 あの人ならば、とても承知してくれまい。
- 五 私が身代りに立ちたうございます。
- 六 皆さん、これが目じるしだよ。
- 七 それは弟の本でせう。どうぞその儘にして置いてくださいまし。

B 次の文から助動詞をぬき出し、その種類をいへ。

- 一 あんなに海が荒れたのに、よく平氣で居られたね。
- 二 舟は私どもの家です。ちつともこはい事はありません。



- 三 「蟬せみの代りに蜻蛉とんぼを捕らうか。」いや、蜻蛉は益蟲けいじゆうだから、捕らならい方がよからう。」
- 四 川で誰か遊んで居るらしい。僕も行きたいな。よし、お母さんに伺つて見よう。
- 五 五時に起されてラヂオ體操に行つたら、私は三番目だつた。
- 六 この頃少し泳がれるやうになつて、嬉しくてたまりません。
- 七 午後叔父さんが魚釣に行かれるので、私もついて行つた。弟も行きたが、つたが、寒いのでやめさせた。
- C 二次の文に誤があつたら正せ。
- 一 何もしずに遊んで居やうと考へた。
- 二 これから大いに勉強しやうせう。
- 三 齋藤はよもや失敗はせまいと思ふが、どうだぬうかね。
- 四 人がき來ようが、き來まいが、平氣で居る。
- 五 何事をなすにも、意志が強くあらねばならぬ。

助詞

助詞の種類  
第一種

第十八章 助詞

〔其〕助詞は、他の語に附いて、その語と他の語との關係を示し、或は之に一定の意味を添へる語である。

○助詞は附屬する語であつて、活用が無い。

〔毛〕助詞の主なもの、は大體次の通りである。

第一種の助詞 主に體言に附くもの。

- が 鳥が鳴く。 私は水が飲みたい。
- の 梅の花。 私の讀んだ雑誌。
- を 手紙を書く。 行列が門前を通る。



第二種

〔天〕第二種の助詞 主に用言及び助動詞に附いて、接續詞の  
 様なはたらきをするもの。

に	室内に居る。	政治家になる。
へ	東へ向ふ。	此處へ來い。
と	軍人となる。	弟と遊ぶ。
りから	門から出る。	昨日から始めた。
りより	山より高い。	君より早く來た。
で	汽車で通學する。	庭で遊ぶ。

ば 讀めばわかる。 やすければ買はう。  
 と 讀むとわかる。 やすいと買ふつもりだ。  
 ても 見てもわかるまい。 をかしくても笑はない。  
 けれど(も) 止めるけれど(も)やめない。  
 が 風は吹くが寒くない。 つらいが我慢する。

のに よせと言ふのにやめない。  
 からので 雨が降るからので遠足はやめた。  
 し 雨も降るし風も吹く。 色もいゝし形もいゝ。  
 て 見て來る。 細くて長い。  
 ながら 歩きながら見る。 知りながら教へない。  
 たり 寝たり起きたりぶらぶらしてゐる。  
 勝つたり負けたりする。

「ば」は用言の假定形に、「て」「ても」は動詞形容詞の連用形及び  
 動詞の音便形に附く。「ながら」は動詞の連用形、形容詞の終止  
 形に、「たり」は動詞形容詞の連用形及び動詞の音便形に、「ので」  
 は用言の連體形に附く。他は用言の終止形に附く。



第三種

「て」「ても」「たり」が音便形に附くと、「で」「でも」「だり」となることがある。

〔五〕第三種の助詞 第一種第二種以外の助詞で、いろ／＼の

意味を添へるもの。

は 私には知りません。 鯨は魚ではない。  
も 弟も起きた。 桃も櫻も咲いた。  
さへ 手にさへ取らない。 行きさへすればいいのだ。  
でも お茶でも飲まうか。 負けてもすると恥しい。  
しか 三つしかない。 さうとしか考へられない。  
まで 此處まで来い。 私にまで手紙を下さつた。  
ばかり 二時間ばかり休んだ。 行先ばかり考へる。  
だけ 私だけが知つてゐる。 見ただけで歸つた。  
なり あなたなり私なり誰か残つて居ませう。

活用の有無による品詞の分類

〔六〕品詞は、以上述べたやうに九種ある。之を活用の有無によつて分類すれば、次の通りである。

一、活用のない品詞

- 名詞 代名詞 (體言)
  - 副詞 接續詞 感動詞
  - 助詞
- 獨立する語
- 附屬する語



二、活用のある品詞

動詞 形容詞

(用言)

獨立する語

助動詞

附屬する語

練習題 一八

A 傍線をつけた助詞の種類をいへ。

一 フィリップが薬を調合しに別室へ退いた後へ、王の日頃信頼してゐるバルメニオ將軍から、王にあてた密書が届いた。

二 名物の馬市が始まつてゐるといふので、朝から見物に行きま

三 馬のそばを通るのは危険なやうですが、なれると平氣になります。

B 次の文から助詞をぬき出し、その種類をいへ。

一 太郎さんは、雨が降つて、つまらないなあ、といひながら、傘をさ

して出かけました。

二 少し行くと、時計屋の内からラヂオが聞えて來ました。

三 雨は今夜のうちにやんで、明日は天氣がよくなりませう。

四 昔から雪は豊年の兆といふから、今年もよくみのるだらう。

五 万年筆なり鉛筆なり、そこにあるので、書くがよい。

C 次の文を單語に分ち、一々の單語の品詞と、活用ある語ならば、そ

の活用のしかたとを述べよ。

一 <sup>私</sup>は<sup>この</sup>國に<sup>生</sup>れた<sup>こと</sup>を、<sup>一</sup>日も<sup>感</sup>謝<sup>し</sup>ない<sup>こと</sup>は<sup>あ</sup>り<sup>ま</sup>す。

二 <sup>日</sup>本<sup>帝</sup>國<sup>は</sup>、<sup>世</sup>界<sup>に</sup>類<sup>の</sup>無<sup>い</sup>立<sup>派</sup>な<sup>美</sup>しい<sup>國</sup>で<sup>あ</sup>り<sup>ま</sup>す。

三 <sup>世</sup>代<sup>々</sup>に<sup>傳</sup>へ<sup>ら</sup>れ<sup>て</sup>來<sup>た</sup>、<sup>私</sup>も<sup>あ</sup>なた<sup>の</sup>お<sup>父</sup>さん<sup>な</sup>ど<sup>と</sup>一<sup>緒</sup>に、<sup>よ</sup>く<sup>道</sup>普<sup>請</sup>に<sup>出</sup>た<sup>も</sup>の<sup>で</sup>した。

四 <sup>あ</sup>なた<sup>も</sup>、<sup>あ</sup>なた<sup>の</sup>お<sup>父</sup>さん<sup>な</sup>ど<sup>と</sup>一<sup>緒</sup>に、<sup>よ</sup>く<sup>道</sup>普<sup>請</sup>に<sup>出</sup>た<sup>も</sup>の<sup>で</sup>した。







副詞になつたもの

接續詞になつたもの

感動詞になつたもの

副詞になつたもの

動詞から

あまりひどい つまりお前が悪いのだ

接續詞になつたもの

動詞から

陸軍及び海軍

副詞から

山もあり、また野もある  
もつとも

助詞から

が で けれども

感動詞になつたもの

代名詞から

これ あれ それ どれ

練習題 一九

次の文から轉成の品詞を選び出し、何から轉じたかを述べよ。

一 登りには五時間かゝつたが降りには一時間しかかゝらなかつた。

二 色々むづかしい事をいふが、つまりどうすればよいのか。

三 あまり遠くへ行つては歸れなくなりましたよ。

四 はじめの調子は大變よかつた。が終に近づく、すつかり亂れてしまつた。

五 どれ私も出かけよう。

六 明日午前中に御出で下さい。もつとも、御都合によつては、午後でもよろしうございます。

七 山の上には蚊も居ないし、又蠅も居ない。

第二十章 複合語

〔三〕二つ以上の單語が合して一語となつたものを複合語といふ。複合語は、文法上一つの單語として取扱はれ、何れかの品

複合語



複合の名詞

詞に屬する。その主なものは次の通りである。

一名詞

山櫻 朝日 電車道 インキ壺 (名詞と名詞)

筆入 鉛筆削(びり) ズボン釣 (名詞と動詞)

買物 落葉(おちも) 涼臺(すずみだい) (動詞と名詞)

飲食(のみの) 讀書(よみかき) 話しあひ (動詞と動詞)

たゞもの また従兄弟(いとこ) (副詞と名詞)

人々 年々 (同じ名詞と名詞)

右の通り、動詞が複合語をつくるには、連用形を用ひるのが常である。然るに、形容詞はその語幹を用ひるのが通則である。

近道 遠山 輕石 高橋 嬉し涙

端近(へんぢか) 夜長 足弱 氣短

高飛 遠廻 苦笑(くせう) まうけ高

複合の代名詞

二代名詞

誰それ どこそこ (代名詞と代名詞)

なに〜 だれ〜 (同じ代名詞と代名詞)

三動詞

持ち上げる 追ひ出す 見送る (動詞と動詞)

心ざす 物語る ゑがく (名詞と動詞)

近寄る 長びく 若がへる (形容詞と動詞)

「噂する」「吟味する」「感ずる」なども複合動詞である。

四形容詞

しほからい 名高い 胸苦しい (名詞と形容詞)

むしあつい 見ぐるしい (動詞と形容詞)

細長い 暑苦しい 薄寒い (形容詞と形容詞)

複合の形容詞



複合の副詞

五 副詞

誠に

(名詞と助詞)

至つて 却つて

(動詞と助詞)

絶えず 思はず

(動詞と助動詞)

どうぞ どうか

(副詞と助詞)

複合の接續詞

六 接續詞

ところが ところで

(名詞と助詞)

それから それで それに そこで (代名詞と助詞)

並びに したがつて すると (動詞と助詞)

又は (副詞と助詞)

だが ですけども だから (助動詞と助詞)

では でも (助詞と助詞)

○「人々」ひとり「なにく」などのやうに、同じ語を重ねて出来た語を、特に疊

疊語

語といふことがとある。

〔六〕單語が合して複合語となる時、その單語の音が變ずることがある。

しろ(白)―ほ(帆) しらほ(白帆)

さけ(酒)―をけ(桶) さかをけ(酒桶)

はる(春)―あめ(雨) はるさめ(春雨)

ほん(本)―はこ(箱) ほんばこ(本箱)

この中、はこが、ほんばこに於て、ばことなるやうに、下の語の最初の音が濁音になることを連濁といふ。

連濁

練習問題 二〇

A 次の文から複合語をぬき出して、それがいかなる品詞に屬するか、又いかなる語から成つてゐるかを述べよ。



- 一 シベリヤの夏は、夜半でも日本の六時頃よりもつと明るい。
  - 二 賑かな人聲がするので、そつと板塀の隙間からのぞいて見ると、十人あまりの男が、庭の踏石の下に大きな菰冠を据ゑて、酒盛をするのであつた。
  - 三 朝霧が晴れて、あちらこちらで雀の鳴聲がする。
  - 四 後にはアメリカ行の汽船が出帆するのです。
  - 五 旅立つ人々と見送る人々とは、互に別れを惜しんでゐた。
  - 六 近寄つて見ると、それは隣村の幼友達であつた。
- B 次の語の品詞とその成立とを述べよ。
- 道傍 賣出日 只事 あがりおり むだづかひ  
おとしいれる(陷) 名づける 待ち遠い  
幸に(成功した) どうぞ(御出で下さい)

第二十一章 接頭語・接尾語

〔五〕 お寺 寸足 き醬油

接頭語

右の「お」「す」「きは」「寺」「足」「醬油」のやうな語の上に附いて、之に或意味を付け加へてゐる。かやうに、いつも他の語の上に附いて或意味を加へるものを接頭語といふ。

〔六〕 春めく 赤み 佐藤さん

接尾語

右の「めく」「み」「さん」は「春」「赤」「佐藤」などの語の下に附いて、之に或意味を付け加へてゐる。かやうに、いつも他の語の下に附いて、之に或意味を加へるものを接尾語といふ。

接辭

〔七〕 接頭語及び接尾語は決してそれだけでは用ひられず、必ず他の語に附いてあらはれる。かやうなものを接辭といふ。接辭が附いたものは、文法上、一語として取扱ふ。



接頭語と品詞  
接頭語の主なもの

〔六〕接頭語の附いて出来た語の品詞は、もとの語と同一である。  
接頭語の主なものは、次の通りである。

お宅 御縁 はつ春 まつ先 まん巾

き蕎麥 す顔 (名詞)

小高い か弱い お早い (形容詞)

こざれいに お静かに (副詞)

接頭語と品詞  
接尾語の主なもの

〔充〕接尾語の附いて出来た語の品詞は、接尾語によつてきまる。  
接尾語の主なものは、次の通りである。

一 名詞又は代名詞を作るもの

大尉殿 齋藤さん 神様

家来ども 親たち 學生等 あなたがた

三枚 五疋 五番目

深み 苦しみ いやみ 高さ 悲しさ 寒け

二 動詞を作るもの

春めく 學者ぶる 面白がる 羨しがる

窮屈がる いやがる

三 形容詞を作るもの

男らしい 議論がましい

四 副詞を作るもの

花やかに はれやかに

接頭語・接尾語

A 次の文から接頭語・接尾語の附いてゐる語を選び出せ。

一 小一時間も闇の中に立つてゐると、眞夜中のうすら寒い風が、  
しん／＼と身にしみてきた。

二 さつと吹く風と共に黄ばんだ木の葉が、遊んでゐた子供の頭  
にはら／＼と散りかゝつた。



三 國雄君、お手紙ありがたう。叔父さんや叔母さんもお變りな  
く、君も元氣で、何よりです。

四 小舟の向ふには、大船が三艘五艘と、かたまつてゐる。  
B 一次の語から接尾語をぬき出せ。

宮様 子供らしい 三軒目 大人ぶる 私ども  
眠け 歸りがけに 痛がる 勝手がましい  
青み 少佐殿 古めかしい 澁み

### 第三篇 文の成分

#### 第二十二章 文と文の成分

〔40〕 春が來た。

花がきれいだ。

右の例のやうに、一つの纏まつた思想を云ひ表はす一つゞき  
のことばを文といふ。文の終では必ずことばが切れる。文  
字で書く時は。を附ける。

〔41〕 庭の櫻がきれいに咲いた。

すべて文は單語から成立つものである。右の文も多くの  
單語で出來てゐる。その中の「庭の櫻が及びきれいに咲いた」  
も、亦いくつかの單語から成立ち、それ等の單語が結合して或  
意味を表はしてゐる。しかし、まだ全部が纏まつて一の文を

文



連語

成すには至つてゐない。かやうに、二つ以上の單語が結合してゐるが、まだ文になつてゐないものを連語といふ。

庭の 櫻が 私に これも

咲いた 行かない あるらしい 犬だ

庭の櫻 我が身 飛ぶ雲 暑い日

きれいに咲く 非常に寒い

新聞を読む 何處へ行く 山に登る

これ等は皆連語である。

連語の中「咲いた」「行かない」「あるらしい」「犬だ」のやうに、助動詞が他の語に附いたものを活用連語といふ。

〔七〕 月が山から出た。

右の文は、六つの單語から成立つてゐる。その中、「が」「から」「た」は、何れも附屬する語で、獨立する語「月」「山」「出」に附屬してゐるの

活用連語

文の成分

文の成分と獨立する語・附屬する語

であつて、これ等の獨立する語が無ければ、決して用ひられな  
い。故に、右の文は

月が 山から 出た。

の三つの部分から成立つものと見ることが出来る。これ等の部分は、相合して一つの纏まつた思想を表はし、一つの文となるのである。このやうに、文を組立てる各部分を文の成分といふ。

〔七〕 月が 山から 出た。

海も きれいに 見える。

右の例のやうに、文の成分には必ず獨立する語が必要である。獨立する語は、「きれいに」「見える」のやうに、單獨でも成分となることがあり、また「月が」「山から」「出た」「海も」のやうに、附屬する語が附いて成分となることもある。



文の成分の種類

附屬する語は、それだけで文の成分となることなく、必ず獨立する語に伴つて之と共に成分となる。  
〔五〕文の成分には、主語述語修飾語の三種と、外に獨立語といふ特別なものがある。

練習問題 三三

A 次の文から活用連語を選び出せ。

一 貧しい人々のあはれな有様に心をうたれて、これからはわがまゝの念は起すまいと決心しました。

二 あれは飛行機が飛ぶのです。

三 あまり暑かつたので、永くはゐられませんでした。

B 次の文を成分に分ち、その中の獨立する語と附屬する語とを擧げよ。

一 獨逸軍はパリに迫りました。

二 お前は會稽の恥を忘れたか。

三 四日市を過ぎて、平野から次第に山地に移る。

四 機體が急に揺れたので、私は思はず前の椅子につかまつた。

五 私の村は夜になると、所々の家から槩を打つ槌の響が聞える。

第二十三章 主語と述語

〔五〕

(甲) 雲雀が 飛ぶ。

(乙) 人生は 短い。

(丙) あれは 巡洋艦です。

右の(甲)の文は、何が、どうするかを表はし、(乙)の文は、何が、どんなであるかを表はし、(丙)の文は、何が、何であるかを表はしてゐる。文の中で、右の「飛ぶ」「短い」「巡洋艦です」のやうに、何が、どうするか、「どんなであるか」「何であるか」を表はす成分を述語と

述語



主語  
主語になる語

いふ。また、右の「雲雀が」「人生は」「あれは」のやうに、「何が」を表はす成分を主語といふ。

〔夫〕主語になる語

鐘が鳴る、

第一學期は終つた。

これも新しい。

體言

右のやうに、體言が主語になるのが普通である。その場合に體言の下に助詞が附くのが普通である。

〔毛〕

なまけるのは罪惡だ。

大きいのがこはれた。

丈夫なものもある。

用言

右のやうに、用言が主語になることもある。その場合に用言の下に助詞が附くのが普通である。

對等の體言の重  
なつたもの

〔夫〕

松島・宮島・橋立は日本の三景である。

右の文に於て、「松島」「宮島」「橋立」の三つの語は互に對等のものであつて、それが重なつて主語となつてゐる。かやうに、對等の體言が重なつて主語となる事がある。

太郎と次郎が繪を描いてゐる。

博物館及び動物園は上野公園にある。

右のやうに、對等の體言が、助詞又は接續詞によつて結び付けられたものが主語となることがある。

〔五〕述語になる語

電車が走る。電車が走ります。

今日は寒い。今日は寒いだらう。

これも丈夫だ。これも丈夫だらうか。

右のやうに、用言が述語になるのが普通である。その場合に、

述語になる語

用言



用言が單獨で用ひられることもあり、又助動詞や助詞が附くこともある。

〔八〇〕

これは 万年筆だ。

これは 万年筆さ。

幹事は

あなたで

すか。

幹事は 君か。

右のやうに、體言に助動詞や助詞の附いたものが述語になることもある。

體言

〔八一〕

(甲) 我輩は 猫である。

幹事は

私で

ございます。

恩を知らない者は 人でない。

(乙)

今日は 寒くは ありません。

氣候も 悪くない。

(丙)

室内は 静かである。

それは 確かで ございます。

世間が 穩かでない。

(丁)

私は すわつてをります。

電燈が 消えてゐる。

弟は 眠つてしまつた。

君も 行つてくれるか。

どなたも お休み下さいました。

私が 読んであげませう。

戸が あけてある。

右の如く、種々の語に動詞又は形容詞が附いた連語が述語となる事がある。

〔八二〕

彼は 畫家で、詩人だつた。

罌粟の花は 赤くて、大きい。

我々は 疲れ、かつ 飢ゑた。

動詞・形容詞の附いた連語



右の如く、同じ主語に對する述語が對等の資格で重なる事がある。その場合に助詞又は接續詞を用ひる事がある。

練習題 二二

次の文の主語と述語とを指摘し、それが如何なる語から成立つてゐるかを説明せよ。

- 一 秋名が助来た助。萩名が助さいた助。
- 二 それは代何代だ助。
- 三 早い形のが助よ助から助う助。
- 四 太郎名と助次郎名は助兄弟名で助ござ助います助。
- 五 われ代も助小學生名では助あり助ませ助ん助。
- 六 時計名は助こ助は助れ助ま助し助た助か助。
- 七 自動車名や助自轉車名が助通助り助始助め助た助。
- 八 誰代か助遊助ん助で助る助。

一〇 九

私代も助休助ま助せ助て助も助ら助は助う助。  
彼は代醫者名で助か助つ助畫家名で助ある助。

第二十四章 修飾語

〔八三〕

お寺の 鐘が かすかに 鳴る。

白い 犬が 吠えた。

右の例の「お寺の」「白い」は、主語たる體言「鐘」「犬」に附いて、どんな鐘であるか、どんな犬であるかを示して、「鐘」「犬」の意味を委しく定め、かすかには、述語たる用言「鳴る」に附いて、どんなに鳴るかを示して、「鳴る」の意味を委しく定めてゐる。

猫は 鼠を 捕る。

湯が 水に なる。

右の「鼠を」「水」は、述語として用ひられた用言「捕る」「なる」に附い



修飾語

連體修飾語  
連用修飾語

て、何<sup>〇</sup>を捕るか、何<sup>〇</sup>になるかを示して、漠然たる「捕る」「なる」の意味を精密にし、定めるものである。  
かやうに、他の語に従屬して、その意味を委しく定める事を修飾するといひ、修飾する爲に用ひられた文の成分を修飾語といふ。

〔八四〕修飾語には二種ある。前の例の「お寺の」「白い」のやうに、體言を修飾するものを連體修飾語又は形容詞的修飾語と云ひ、かすかに「鼠を」「水に」のやうに、用言を修飾するものを連用修飾語又は副詞的修飾語といふ。

〔八五〕連用修飾語の中「鼠を捕る」「水になる」「鼠を」「水に」は、用言「捕る」「なる」の意味の缺けた所を補ふものである。かやうなものを特に補語といふ事がある。

〔八六〕連體修飾語になる語

補語  
連體修飾語になる語

庭の梅 私の本 五本の指

あちらの山 昨日までの期限

途中での出来事

右のやうに、體言又は體言に助詞の附いたものに助詞「の」が附いて、連體修飾語になるものがある。

〔八七〕 飛ぶ 蟲 流れる 水 立派な 家

黒い 鳥 △錆びない ナイフ △歸朝した 大使

右のやうに、用言又は之に助動詞の附いたもの(活用連語)の連體形が連體修飾語になる事もある。

〔八八〕 赤く小さい 花 やすくつて面白い 本

愛知・静岡の 二縣 關東と關西との 境界

日本及び支那の 建築

右の如く、對等の用言又は體言が重なつて、連體修飾語となる

對等の語の重なつたもの

用言の連體形

體言に「の」の附いたもの



連用修飾語になる語

事がある。その場合に、助詞又は接續詞を用ひる事がある。

〔八〕 連用修飾語になる語

ゆつくり 歩く。 かなり 穩かだ。

氣分が 朗らかに なつた。 性質が 溫和に見える。

靜かには 歩かれない。 ちつとも 寒くない。

右のやうに、副詞が連用修飾語になる事が多い。

副詞

〔九〕 烈しく 戦ふ。 長く 住む。 ひどく 苦しい。

舉動が あらゆるしく なる。

顔が やさしく 寫つた。

早くは 驅けられない。 固くも 約束しなかつた。

右のやうに、形容詞の連用形が連用修飾語になる事もある。

形容詞の連用形

〔九〕 今 汽車が 着いた。

私は 本を 五冊 買つた。

體言

昨日から 學校が 始まつた。

水中に 藻が 生えてゐる。

私が 齋藤に 逢はう。

船は 東へ 向つた。

會員は 五十名と なつた。

幹事が 名簿を 作つた。

父母の恩は 山より 高い。

加藤氏は 國史に 精しい。

右のやうに、體言が連用修飾語になる事がある。その場合に、

體言が單獨に用ひられる事もあり、又種々の助詞が附く事も

ある。

〔九〕 (甲) 今日は 散歩するのを やめた。

立つのは すわるのより 樂だ。



用言に助詞の附いたもの

小さいのは 大きいのに かなはない。  
〔乙〕 私は 驚いて 立ち上つた。

彼は 立ちながら 挨拶した。

彼は 若いのに よく働く。

どんなに 勧められても 私は行かない。

右のやうに、用言に助詞が附いて、連用修飾語となる事がある。

○〔甲〕は連體形の用言に「が」が附いたものが、「—する事」—するもの「の」やうな意味を表はし、その下に更に第一種の助詞が附いたものである。〔乙〕は、用言に第二種の助詞〔接續詞に似たもの〕が附いて、理由原因條件その時の事情などを表はすものである。これらも連用修飾語と見るべきものである。

〔九三〕

観光團は 今日か明日 京都・大阪を 見物する。

あの人は 去年と今年と 二度 賞状を もらひま

した。

對等の體言が重なつたもの

片桐且元は 秀吉並びに秀頼に 仕へた。

右のやうに、對等の體言が重なつて、連用修飾語となる事がある。その場合に、助詞又は接續詞を用ひる事がある。

〔九四〕

〔甲〕 私どもは 數十人の 白衣の 旅人に 逢ひました。

弟の 新しい 紺の 羽織が 見えない。

〔乙〕 その子は 急に はらくと 落涙した。

私は 弟に 英語を 教へる。

弟は お父さんから 時計を 戴きました。

室を きれいに しませう。

同じ語に二つ以上の修飾語が附く

右のやうに、同じ語に二つ以上の修飾語が附く事がある。

〔九五〕

非常に 蒸暑い 晩。

馬を 走らせる 少年。



修飾語に修飾語が  
附く

右のやうに、修飾語は、他の修飾語に附く事がある。

練習題 二四

- 次の文から修飾語を選び出し、どの語を修飾するか、又どんな種類の修飾語であるかを述べよ。
- 一 鳥羽僧正は滑稽的な繪を描きました。が、これはたゞの漫畫とは違ひます。
  - 二 彼はその柿を三つ續けざまに食つた。三つ目の時には顔を少ししかめた。多分、いくらか濫いところがあつたらう。
  - 三 文鳥は、つと嘴を餌壺の真中に落した。二三度左右に振つた。粟がはらくと籠の底にこぼれた。
  - 四 彼は顔を洗ひに風呂場へ行つた。
  - 五 二里ばかり進むと峠になる。

呼掛ける語

- 六 上の方から杖を突きながら下りて来る老人に逢つた。
- 七 太郎さんは、あまり大きな桶で水を汲んだので、疲れてしまつた。
- 八 荷田春満、賀茂真淵、本居宜長、平田篤胤を國學の四大人といふ。
- 九 頼朝の顔色は、さつと變りました。
- 一〇 これには深い事情があつたのです。

第二十五章 獨立語

〔九六〕

佐藤さん、あなたは一寸お待ちなさい。  
 太郎や、お前もお出で。  
 右の「佐藤さん」「太郎や」は呼掛ける語である。  
 やあ、それは大變だ。  
 ああ、これも駄目だ。



感動を表はす語

右の「やあ」「ああ」は感動を表はす語である。

はい。私も参ります。

いゝえ、それは違ひます。

應答の語

右の「はい」「いゝえ」は應答の語である。

九月一日、私は一生この日を忘れないでせう。

町村は、町村長がその代表者となる。

提示する語

右の「九月一日」「町村は」は特に重要な事物をまづ提示する語である。

空は晴れてゐた。しかし、波は高かつた。

栗の木はよく濕氣に耐へる。だから、鐵道の枕木等に用ひられる。

接續の語

右の「しかし」「だから」は接續の語である。

以上の諸例に於て、呼掛、感動、應答、提示、接續等を表はす語は、

獨立語

文の成分である。しかし、主語でも述語でも修飾語でもない。これ等は、他の成分とは直接の關係が無く、比較的獨立したものである。かやうに、主語、述語、修飾語の何れにも屬せぬ成分で、他の成分と直接の關係がないものを**獨立語**といふ。

○獨立語は主語、述語、修飾語以外の成分である。それ故、その意味や形から、獨立語のやうに見えるものであつても、主語、述語、修飾語と見る事が出来るものは、獨立語としては取扱はない。

夏は、あの人が歸つて来る (連用修飾語)

それは、私は聞かない。 (連用修飾語)

獨立語になる語

〔七〕獨立語になる語

前の諸例のやうに、呼掛及び提示には體言が用ひられ、感動及び應答には感動詞が用ひられ、接續には接續詞が用ひられて獨立語になる。その場合に、體言及び感動詞には助詞が附



對等の體言の重なるもの

獨立語に修飾語の附く事がある

く事がある。

〔九〕 あれとこれと どちらがよい。

右のやうに、對等の體言が重なつて獨立語となる事がある。

〔九〕 獨立語には、修飾語が附く事がある。

經。濟。上。の。困。難、それは彼の熱意の前には少しの障害にもならなかつた。

練習題 二五

A 左の文から獨立語を選び出せ。

- 一 太郎さん、御覽なさい。あれ、西の空に何だか黒い點が見えます。あ、だん／＼大きくなります。
- 二 やあ、飛行機だ、飛行機だ。そら、北の方からも飛んで来る。
- 三 鐵道信號、これには常置信號と手相圖と列車信號とがあります。さあ、それはむづかしい事ですね。だが、私もやつて見ませう。

五 夕食後の散歩、僕はこれが大好きです。

六 子蛙は「おぢさん、およしなさい」とめましました。しかし、大蛙は

一生懸命に息を吸ひこみました。すると、大きな音がして大蛙のお腹が破れました。

七 北極星、これは何時見てもほゞ眞北にあります。ところが、外

の星は時刻によつて、その位置が變るのです。

B 次の傍線を施した部分は、成分上何に屬するか。

- 一 かはゆ、子は棒で育てよ。
- 二 死の門は、何人でも之を鎖すことが出来ない。
- 三 來年の春は、歐洲へ行いでせう。
- 四 向ふの煙の見えるところ、あれが僕の村です。
- 五 私は京都はまだ知らない。
- 六 成績は今日発表されます。
- 七 今日、成績発表の日です。



成分文中の順序

第二十六章 文の成分の位置と省略

〔100〕 一つの文の中の種々の成分の並べ方には一定の順序がある。

〔101〕 花が散つた。

春は面白い。

かやうに、主語は初に、述語は終に来るのが普通である。

〔102〕 強い雨がしきりに降る。

町の建物はかなり立派だ。

太郎は見事な繪を描いた。

私は母に笑はれた。

太郎が花子を泣かせた。

右のやうに、修飾語は修飾せられる語の前に来るのが普通で

主語 述語

修飾語

ある。

〔103〕 私は兄から辭書をもらひました。

先生は私に手紙を下さつた。

われ／＼はのんびりと景色を眺めた。

彼は忽ち大政治家になつた。

赤い大きな花が、高い緑の梢に咲いてゐる。

右のやうに、同じ語に對して二つ以上の修飾語がある場合に、どれが前に来るかは定まりが無い。

〔104〕 あら、どうしたらう。

諸君、之を見給へ。

熟慮斷行、これが彼の生涯のモットーであつた。  
だから、われ／＼は絶えず注意せねばならぬ。

二つ以上の修飾語



獨立語

右のやうに、獨立語は、文の最初に來るのが普通である。

〔105〕

居る<sup>述</sup> 居る<sup>述</sup> 蟲が<sup>主</sup>

煙草は<sup>連用修</sup> 私<sup>主</sup>は のみません<sup>述</sup>。

あれは<sup>連用修</sup> お前<sup>主</sup>も 知つて居る<sup>述</sup>だらう。

どこで<sup>連用修</sup> 君<sup>主</sup>は それを<sup>連用修</sup> 見つけた<sup>述</sup>のか。

はらくと<sup>連用修</sup> 花<sup>主</sup>が 散る<sup>述</sup>。

それを<sup>連用修</sup> 私<sup>主</sup>は 知らなかつた<sup>述</sup>。

倒置

右のやうに、語勢を強め又は語調を整へる爲に、成分の普通の位置を變へることがある。これを倒置といふ。

省略

〔106〕 前後の關係や、その場の事情で、容易に補ふ事が出来る文の成分は、之を言ひ表はさない事がある。之を省略といふ。

あ、(花が)咲いたね。

(あなたは)そこにお立ちなさい。

さあ、出かけよう。君はどう(だ)。

あなたは(それを)知りませんか。

お父さんが之を(私に)下さつた。

練習題 二六

次の文に成分の倒置又は省略があつたら指摘せよ。

一 おお鳩<sup>you</sup>ぼつぼが歌へるんですね。<sup>えらい</sup>

二 節儉は諸徳の母<sup>てい</sup>。

三 瓜の蔓に茄子は<sup>ならぬ</sup>。倒置

四 その話は私も聞いてゐる。

五 東京は昔江戸<sup>か</sup>といつた。

六 牛若丸が<sup>だ</sup>れた<sup>だ</sup>そこにあるのは、と言ひますと、その男は大きな聲で叫びました<sup>よ</sup>。辨慶だ。さあ、出せ、その刀を。

七 やがてすさまじい音を立てながら、數臺の戦車が來ました。



八 汽車の速度はやゝ加はつた。道下りになつたのである。もう汽車隣縣に入つたのであらう。

練習題 二七

A 次の文を成分に分けよ。

- 一 お寺の中は、もううす暗くなつた。
- 二 番人は、天井から吊したランプに火を燈した。
- 三 ふとそのランプを見たガリレオは、おやと思ひながら、そこに立止つて、じつと見つめた。
- 四 燈されたランプは、靜かに左右へ動いてゐるのだ。
- 五 ガリレオの發見は、七十餘年後に、ホイヘンスの振子時計の發明となつたのです。
- 六 戰の眞最中、小さい傳令使である鳩は、空中に高く舞ひ上つた。
- 七 二、三回上空に輪を廻がいた鳩は、やがて東方へ飛び去つた。

- 八 鳩はふと鷹の一群を見たので、すばやく低空に移つた。
- 九 すると、今度は敵軍から、忽ち一齊射撃を受けた。
- 一〇 重い傷にも屈せず、鳩はなほ暫く飛び續けた。けれども、遂に痛みに耐へず、木の枝に止つた。

B 次の文を成分に分ち、各成分の成立を説明せよ。

- 一 私たちも先生に連れられて、大演習の拜觀に出かけました。
- 二 拜觀に來た人々は寒いので、皆外套の襟に首をうづめてゐた。
- 三 いや、叔父さん、あなたのお心持は私にもよく分ります。
- 四 うか暫く待つて下さい。
- 五 名高い大阪城の石垣には、縦六米、横十一米の、すばらしく大きな石があります。
- 六 コロンブスの卵、これはかなり名高い面白い話です。



改制  
新文典  
初年級用 終

補充問題

補充問題

一 (第二章)

練習題二の中の單語を獨立する語と附屬する語とに分けよ。

補充問題

二 (第三章)

次の文から、主語と述語とを見出せ。

- 一 高い山が見える。
- 二 この本はするぶんむづかしい。
- 三 隣の家は新しい洋館です。
- 四 庭の中もきつと立派だらう。
- 五 公園の櫻はまだ咲かないか。
- 六 春分には太陽が真東から出ます。



七 有名な洞庭湖は支那湖南省の北部にある。

補充問題 三 (第五章)

次の文の一つ一つの単語の品詞をいへ。

- 一 臺灣ではめつたに雪が降らぬが、新高山には雪を見ることがある。
- 二 やあ、日が暮れる。早く歸らう。
- 三 さあ、それはこまる。しかし私は決して悲観しない。
- 四 天氣がよいので海には船がたくさん見える。
- 五 ふと目がさめると、夜まはりの拍子木の音が、かすかに聞えました。音が、やがて消えました。

補充問題 四 (第七章)

次の文から名詞代名詞をぬき出し、かつ代名詞はその種類をいへ。

- 一 弟橘媛が荒狂ふ波間にお飛びこみになつてから七日目に、一枚の櫛が海岸に流れ着いた。
- 二 何か言つたのは誰だらう。音がして姿は見えないが、どこにあるのだらう。
- 三 「お前の落した財布はこれだらう。」はい、それでございます。
- 四 舟で来た人も陸から来た者も、入りまじつて、何百人あるか数へきれない。
- 五 もし、あなた、そちらには何もありません。どうぞこちらへお出で下さい。
- 六 品物があまり澤山あるので、どれに決めようかと、私は迷つてゐるのです。



- 七 日本的人口は一年に百萬ばかり殖えます。
- 八 晴れやかな朝の海。雲が切れる、かもめが飛ぶ。吹く風はさわやかに、ふむ砂はさく／＼と鳴る。

補充問題

五 (第九章)

次の文の傍線を附けた動詞の活用の種類をいへ。

- 一 夏の末になると、油蟬は木の皮にきすをつけて、その中に卵を生みます。
- 二 卵はそのまゝで冬を越して、翌年の夏ひるのなつになつますが、その時は二耗たぐららるの小さい蟲です。
- 三 この小蟲がやがて木を下りて、柔い土の中にもぐり、満六年間地中にゐるのです。
- 四 七年目の夏の夕方、油蟬の子は穴から地上へ出ます。鳥などは大抵寝てゐる頃です。

- 五 やがて蟬の子の背中の皮が縦に割れて、中から體が現れ、すぐに背が出頭が出る。
- 六 しわくちゃにたゞまれてゐた羽が見る間に延びます。
- 七 油蟬はそれから二三週間生きてゐるのですが、長い地下生活に比べると、何といふ短い命でせう。

補充問題

六 (第十章)

A 次の文の傍線を附けた動詞の活用の種類及びその活用形をいへ。

- 一 親山や羊は、秋の日をあびてすわつてゐましたが、私の足音を聞きつけてすつくと立ち上りました。
- 二 二匹の子山羊は、鳴き聲を立てながらこつちへかけて來ました。
- 三 草をどさりと投げてやると、三匹がおいしそうに食べ始めました。



- した。
- 四 近所の人もだん／＼知るやうになり、道で逢ふと、互にあいさつするほどでした。
- 五 潮がすつかり落ちて、海はをかのやうになつた。見渡せば何處も人ばかりで、何百人か數へきれない程ゐる。
- 六 うちの前には小川が流れてゐて、舟も浮ぶし魚釣も出来る。
- 七 暇がないからとて勉強しない人は、暇のある時には、なほさらなまけて遊びたがるものだ。
- B 次の文に誤があつたら正せ。
- 一 考えて見たが、今強いて拵えない方がよからう。
- 二 私もそろ／＼歸ろうと思ひますから、君は残つていて下さい。
- 三 「天地に對して恥じるところがない」と言いきれる人間になれ。
- 四 私がいくら熱心に教えても、弟はどうしても覺へようとしな

- 五 昔から「老ひては子に従へ」と言うが、若い者はまた年寄をいたはらなければならぬ。
- 六 松の生へてゐる芝生の間を通つて行くと、二重橋が見へ、右の方には御所のお屋根も拜される。
- 七 或時は飢え、或時は凍ゑて、いろ／＼な困難に遇いましたが、よくこれに堪えて、終に目的地に達しました。
- A 次の文から形容詞、形容動詞をぬき出して、その種類と、そこに用ひられた活用形の名をいへ。
- 一 高くて名高い山は富士山さ。
- 二 どの子馬も、かはいらしい顔をしておとなしくつながれてゐます。
- 三 あの人と言ふことが確かなら、何も不安な事はないはずだが。

補充問題

七 (第十一章)



- 四 品がよければ値段が高いし、なか／＼やすくてよい品はないものだ。
- 五 面白からうと思つて買った本が、案外面白くないので、がつかりした。
- 六 新しいものの中にもわるい事があらうし、古いものの中にだつて、よい事がないとは限らない。
- 七 平坦だらうと思つて来た道路が非常に急なので、豫定以上の時間を費した。

B 次の文に誤があつたら正せ。

- 一 くやしからうが、悲しからふが、私の知つたことではない。
- 二 惜しむことをした。一點の差で負けた。
- 三 勝つた方は愉快でしやうね。
- 四 そりや愉快だらうさ。
- 五 客扱がぞんざいなれば、店がさびれるにきまりきつてゐる。

補充問題 八 (第十二章)

次の文に誤があつたら正せ。

- 一 庭がひらう(廣)ございますから、少しぐらゐさわひ(騒)でも邪魔にはなりません。
- 二 君に頼むで置ゐたボールを持つて来てくれ給へ。
- 三 人々は先を争ふて之を見ようとした。
- 四 おめでとう存じます。ほんたうによろしゆうございましたね。
- 五 冬至からは、日がだん／＼長ふなる。

補充問題 九 (第十三章)

次の文から副詞をぬき出し、かつそのの修飾する語をいへ。

- 一 太郎はまだ來ないのか。直ぐ呼びにやれ。



- 二 今日山がするぶんはつきり見える。
- 三 若し及第したら、時計はきつと買つてやらう。
- 四 箱根の大涌谷おほわだでは、ガスが盛に噴出するので、うっかり近寄れない。
- 五 箱はかなり丈夫に出来てゐるが、とても三年間は使へまい。
- 六 あれはどんなに叱られても、決して泣かない子でした。
- 七 私の考では、あれは確かに海だよ。あなたはどう思ふ。

補充問題

一〇 (第十四章)

次の文から接續詞をぬき出せ。

- 一 信作は池の中へ轉げこんだ。しかも其處は深いところであつた。
- 二 あの人は演説はうまいし、それに文章も下手ではない。
- 三 今日はこれで散會します。なほ明日は午前九時に開會しま

- 四 あなたは直ぐお歸りなさいますね。では明後日またお目にかゝりませう。
- 五 先刻命令に接しました。よつてすぐ一同に傳へました。出發は明日になるか、それとも明後日になるか、まだわからない。
- 六 生徒が一時にふえたので、随つて教室が足りなくなつた。
- 七 そんな事があつたのか。だから遅刻したのだね。
- 八 私も出かけて行つて、そしてよく様子を見て來ませう。
- 九 誰も相手あひまてにしてくれなかつた。そこで私はつくづく悲しく思つた。

補充問題

一一 (第十五章)

次の文から感動詞をぬき出せ。



- 一 あ、しまった。又いけない。
- 二 おう、いやだ。蛇がゐる。
- 三 「そんな事はよせ。」え、何ですつて。」
- 四 「おうい、ボールを取つてくれ給へ。」そうら、いつたぞ。」
- 五 いや、これは大變な雪だ
- 六 「さう言つたのは私でした。」まあ。」
- 七 なに、僕だつて負けるものか。
- 八 ね君、一緒に歸らうよ。

補充問題 一一 (第十六章)

傍線を附けた助動詞の種類をいへ。

- 一 これは一人で持ち上げられるやうな石ではない。
- 二 一人で持ち上げられないやうな石がある。
- 三 「出る杭は打たれる」といふ諺を知らんのか。

- 四 讀ませれば讀ませるほど理解が深まるはずだ。
- 五 君も行つたらうと思ふが、行かなかつたのか。

補充問題 一二 (第十七章)

A 二次の文から助動詞をぬき出し、その種類をいへ。

- 一 將軍は負傷兵たちの倒れてゐる野の中に立たれた。
- 二 將軍が後に倒れようとせられるのを、副官がやつと支へた。
- 三 負傷兵達は、たゞ泣くばかりでした。そしてこの將軍の下で死なうと思はないものは、一人もありませんでした。
- 四 ベートーベンは、ナポレオンよりも偉大であらうとさへ言はれる人です。
- 五 もう何も言ふまいと思ふ事もあるが、やつぱりだまつてはゐられない。
- 六 風向が變つた。この分では明日は天氣らしいぞ。



七 弟も見たがるし、私も見たいと思ふが、どうも見られないらしい。

八 皆様が見えませんでしたから、どうぞ直ぐお出で下さいまし。

九 何だらうと手に取つて見たら、ビール瓶の栓だつた。

一〇 兄は、そんな事のあらう筈はないと言ふが、しかし世の中は廣いから、たまにあるまいものでもない。

B 次の文に誤があつたら正せ。

一 若い者は花も見たかろうと思つて、今日はみんなに仕事を休まして花見にやつた。

二 あれは確かに御寺らしゆうござゐましたが、私は参りませんでした。

三 これから勉強を始めやうとすると、電燈がバツト消えてしまつた。

四 若し戦功がありましたら、主人勝久に、出雲一國を頂きとうご

ざいます。

五 誘つたらみな行くだろう。話して御覽なさい。

六 これで宜しいでしやうか。とにかく先生に伺つて参りましたよ。

七 どうだ、あすこには面白いものがあつたらふ。

補充問題

一四 (第十八章)

A 次の文から助動詞・助詞をぬき出し、その種類をいへ。

一 蟹が下から柿の木を眺めてゐると、猿が遊びに來た。

二 猿は、「僕が取つてやらう。」と云つて、するすると木に登つた。

三 大江山に來て見ると、鬼の住む所だけあつて、大木がこんもり生ひ茂り、晝でも薄暗くて、ものすごい山でした。

四 頼光どもは、険しい山道を上つたり、深い谷を渡つたりして、だんだん奥へ進んで行つた。



- 五 暫く行くと、大きい岩のそばに、一人のおぢいさんが立つてゐました。
- 六 あなたは頼光様ではありませんか。私は今日あなたが此處に來られると聞いて、お待ちしてゐたのです。
- 七 私は都の者ですが、鬼にさらはれて、ここに來ました。いつ殺されるか分かりません。それが悲しくて泣いてゐるのです。
- 八 まあ、何といふ有難いことでせう。どうぞ鬼を討取つて私を助けて下さい。
- B 次の文を單語に分ち、一々の單語の品詞と活用ある語ならば、その活用のしかたを述べよ。
- 一 私どもは毎日野や山にばかり寝てゐましたが、おかげで今夜はゆつくり休まれます。
- 二 敵は何時攻めて來るかも知れぬ。攻めて來たら、どうなると思ふ。

- 三 行く者も留まる者も、何も言ふことが出來なくなつた。
- 四 藤吉郎は人夫をうまく使つて、三日で清洲城の修理を仕上げさせた。
- 五 春の少し暖い晩には、かすかに蛙の鳴く聲が聞える。
- 補充問題 一五 (第十九章)
- 次の文から轉成の品詞を選び出し、何から轉じたかを述べよ。
- 一 すぐ近くの山蔭には、泉があるに違ひがないと思つた。けれども、疲れきつて動けなかつた。
- 二 演説を彌次る者や、勝手に話をする者があつて、騒がしい會でした。
- 三 「これ、そんなことを言ふものではありません。」「なに、かまふものか。」
- 四 すすめられるから讀んでみた。が、此の本は、どうも分らない



本だ。  
五 旅客はまだ安らかな眠を續けてゐる。

補充問題

一六 (第二十章)

次の文中の複合語の品詞名、及びそれがいかなる語から成つてゐるかを述べよ。

- 一 多くの魚は親魚のうんだ卵から生れますが、うみたなごは卵をうまずに子供をうみます。
- 二 鉢植や切花にして眺める花には、いろいろ珍らしいものがあります。
- 三 きりんはアフリカの森林や草原にすんで、高さは足から頭まで三メートルもあります。駆け出す力が強くて、これに追いつくものはありません。
- 四 おちいさんが枯木に灰をまきますと、忽ち花盛りになりました。

た。

- 五 時計屋の主人は、早速ピンセットでねぢを挟み上げて、元の蓋ガラスの中へ入れた。
- 六 村の西に櫟林がある。それを通り抜けて、だら／＼坂を上ると、道ばたに大きな赤松がある。
- 七 苗の葉先が朝風に軽くゆれる頃になると、男も女も汗ばみながら泥田の中で働く。

補充問題

一七 (第二十一章)

次の文から接頭語、接尾語の附いてゐる語を選び出し、その成立を説明せよ。

- 一 「皆さん、小石を投げることは、やめて下さい。」「僕等は悪い事をしてゐるんぢやない。たゞ遊んでゐるだけだよ。」
- 二、大王さまのお見舞にも來ない無禮な狐めは何處にゐるか。



- 三 「暑さ寒さも彼岸まで」といふが、今年は何時まで寒い。
- 四 かはいさうに、あの人も失敗したらしい。
- 五 あなたがたは、お二人で、それをどうなさるのです。
- 六 人前ひさまへに出てえらぶつてはいけません。萬事控へめにせよ。
- 七 彼等は、五匹の馬に荷物を附けて、いよ／＼奥地へ入つた。

補充問題

一八 (第二十二章)

A 次の文から活用連語を選び出せ。

- 一 ある日、一寸法師はお父さんに向つて、どうか暫くお暇を下さい。これから京都へ行かうと思ひます。」と申しました。
- 二 お父さんは驚いて、「なせか」と尋ねますと、京都は日本一の都で、えらいお方も大勢居ませう。そこに使はれて、出世したいと思ひます。」と言ふのでした。
- 三 頼光は、しゆてんどうじの首を家來に擔かつがせ、さらはれた女や

子供たちをつれて、めでたく都へ歸りました。

B 次の文を成分に分ち、その中の獨立する語と附屬する語とを指摘せよ。

- 一 一寸法師は淀川をさかのぼりました。そして鳥羽に上陸しました。
- 二 「これは宰相殿のお屋敷だよ。」これがさうですか。立派なものですね。」
- 三 やがて一寸法師は宰相殿の玄關前に立ちました。
- 四 今日けふも雪かな。それとも晝すぎになつたら晴れるかな。
- 五 「室の中に蟲がはいつて困るね。」では、窓に金網かなあみを張らせるといい。」

補充問題

一九 (第二十三章)

次の文の主語と述語とを指摘し、それが如何なる語から成立つてゐる



るかを説明せよ。

- 一 綺麗なものはこはれ易いよ。
- 二 高く見えるのは山でせうか。
- 三 私と弟は早く歸つてしまつた。
- 四 あなたがたは暫く待つて下さい。
- 五 演説してゐるのは會長らしかつた。
- 六 茂林寺の和尚さんが、或日一つの茶釜を買ひました。
- 七 「これはいいな。これは全く珍らしい。」和尚さんはたいへん喜んでゐました。
- 八 ある日その茶釜がむく／＼と歩きだした。茶釜に足がはえたのです。

補充問題

二〇 (第二十四章)

次の文から修飾語を選び出し、いづれの語を修飾するか、又いかなる

種類の修飾語であるかを述べよ。

- 一 春の花と秋の月とは何人にも好まれる。
- 二 溺れる者は藁でもつかむ。
- 三 ころがる石には苔が生えない。
- 四 美しいお庭の隅に一つのお池がありました。
- 五 そこには珍らしい魚が澤山ゐました。
- 六 錦州へ向つた皇軍は、十二月三十日突然優勢な敵軍に出あつた。
- 七 少し暖かくなつた頃から、広い田圃の一部で、苗代の仕事が始まる。
- 八 眞黒な牛がのろ／＼と牽く犁の後に、掘返された新しい土が、日光に照らされる。
- 九 あんな正直な眞面目な人は、今の世には全く珍らしい。
- 一〇 昨日はあまり眠いので、午後に一時間ばかり晝寝した。



補充問題

二二 (第二十五章)

次の文から獨立語を選び出せ。

- 一 やあ大變だ。和尚さん和尚さん茶釜が化けました。
- 二 小僧ども何をとぼけたことを言ふのだ。それ立派な茶釜ぢやないか。
- 三 和尚さんが自分で水を入れて火にかけると茶釜は「あ、あつい」と云つて飛び出したので和尚さんもびつくりして「いや、とんだ物を買つてしまつた」とこぼしました。
- 四 名古屋城の金の鯨、あれは加藤清正の造つたものです。
- 五 有名な人物にならうと志すのはよい。だが誠實な人にならうと心がけるのはなほよい。
- 六 それから熱心に練習を續けた。そして五年の後には立派な音楽家になつた。

- 七 「おうい、これはあなたがたの落したのだらう。」いゝえ、さうぢやありません。「はてな。ぢや、誰のだらう。」
- 八 おとひめ様はしきりに止めました。が、浦島はどうしても聞きません。そこで、おとひめ様は、「では、この箱を上げませう。ですが、この蓋ふたを明けてはいけません。」と申しまして、きれいな玉手箱をお渡しになりました。
- 九 綱公・時貞・光季・武世にはこの四人を頼光の四天王と稱してゐる。

補充問題

二二 (第二十六章)

次の文に成分の倒置又は省略があつたら指摘せよ。

- 一 まあ、きれいですね、今夜の月は。
- 二 松島、あすこには私二度参りました。
- 三 獅子はうなりました、大きな聲で。



四 「何ですか、お腰のものは。」日本一のきびだんごさ。「一つ下さ  
い。お供しませう。」

五 屑屋は、疲れて寝てしまひました。すると、屑屋さんと呼ぶ者  
があります、真夜中に。驚いて室中を見廻しましたが、茶釜の  
外に人は居ません。

六 「やあ、化けた化けた茶釜が。」と叫びました。すると、「まあ、驚か  
なくてもいい。」と、茶釜はすましていひました。

七 やい、何をするんだ。このお姫様を誰だと思ふ。三條の宰相  
殿のお姫様だぞ。めつたな事をする、この一寸法師が承知  
しないぞ。

八 鬼は、誰だと思つたら、この豆つぶだ。生意氣なことを言ふと、  
ひねりつぶすぞ。」といひました。

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
行	行	行	行	行	行	行	行	行	行
ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
キ	リ	イ	ミ	ビ	ニ	チ	シ	キ	イ
ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
	(バ	(バ	(ダ	(サ	(カ				
	行	行	行	行	行				
	バ	バ	ダ	ザ	ガ				
	ビ	ビ	ヂ	ジ	ギ				
	ブ	ブ	ツ	ズ	グ				
	ベ	ベ	デ	ゼ	ゲ				
	ボ	ボ	ド	ゾ	ゴ				



〔第一表〕  
五十音圖

ワ 行	ラ 行	ヤ 行	マ 行	ハ 行	ナ 行	タ 行	サ 行	カ 行	ア 行	ワ 行	ラ 行	ヤ 行	マ 行	ハ 行	ナ 行	タ 行	サ 行	カ 行	ア 行	
ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	ア 段
キ	リ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	ゐ	り	い	み	ひ	に	ち	し	き	い	イ 段
ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	ウ 段
エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	エ 段
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お	オ 段
		バ 行	バ 行	ダ 行	ダ 行	ザ 行	ザ 行	ガ 行	ガ 行			バ 行	バ 行	ダ 行	ダ 行	ザ 行	ザ 行	ガ 行	ガ 行	
		バ	バ	ダ	ダ	ザ	ザ	ガ	ガ			ば	ば	だ	だ	ざ	ざ	が	が	ア 段
		ビ	ビ	ヂ	ヂ	ジ	ジ	ギ	ギ			び	び	ぢ	ぢ	じ	じ	ぎ	ぎ	イ 段
		ブ	ブ	ツ	ツ	ズ	ズ	グ	グ			ぶ	ぶ	つ	つ	ず	ず	ぐ	ぐ	ウ 段
		ベ	ベ	デ	デ	ゼ	ゼ	ゲ	ゲ			べ	べ	で	で	ぜ	ぜ	げ	げ	エ 段
		ボ	ボ	ド	ド	ゾ	ゾ	ゴ	ゴ			ぼ	ぼ	ど	ど	ぞ	ぞ	ご	ご	オ 段



サ 變	カ 變	工 段 一 下										イ 段																			
		ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ		サ	ガ	カ	ア															
爲 る	來 る	植 ゑる	流 れる	越 える	染 める	述 べる	教 へる	連 ねる	出 る	捨 てる	交 ぜる	失 せる	投 げる	受 ける	得 る	居 る	懲 りる	悔 いる	射 る												
(爲)	(來)	植	流	越	染	述	教	連	出	捨	交	失	投	受	得	(居)	懲	悔	(射)												
せし	こ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	り	い	い												
し	き	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	り	い	い												
する	くる	ゑ	れる	え	める	べ	る	ね	る	で	る	ぜ	る	げ	る	け	る	え	る	ゐ	る	い	る								
する	くる	ゑ	れる	え	める	べ	る	ね	る	で	る	ぜ	る	げ	る	け	る	え	る	ゐ	る	い	る								
すれ	くれ	ゑ	れ	え	め	べ	れ	へ	れ	ね	で	れ	ぜ	れ	げ	れ	け	れ	え	ゐ	れ	い	れ								
しせ ろよ	こ い	ゑ	よ	え	よ	め	よ	べ	よ	へ	よ	ね	よ	で	よ	ぜ	よ	げ	よ	け	よ	え	よ	ゐ	よ	り	よ	い	よ	い	よ

定 指	讓 敬	望 希	量 推	了
です だ	ます られる	たがる たい	まい よう う	らしい
でせ だら	ませ られ	たがら		
でし だつ	まし られ	たがり たく		らしく
です だ	(ます) られる	たがる たい	まい よう う	らしい
(な)	(ます) られる	たがる たい	(まい) (よう) (う)	らしい
なら	ますれ られ	たがれ たけれ		
	(ませ)			
形體言、助詞ノ 形容詞の終止	連用 ラレルに同じ	連用	終止(四段) 未然(右以外)	終止、助詞ノ 體言、助詞ノ 未然(四段) 未然(右以外)



〔第二表〕

口語動詞活用表

種類	行名	例語	一	下	上	四	ア
語	カ	着る	カ	ガ	ハ	バ	マ
未然	カ	着る	カ	ガ	ハ	バ	マ
連用	カ	着る	カ	ガ	ハ	バ	マ
終止	カ	着る	カ	ガ	ハ	バ	マ
連體	カ	着る	カ	ガ	ハ	バ	マ
假定	カ	着る	カ	ガ	ハ	バ	マ
命令	カ	着る	カ	ガ	ハ	バ	マ

口語助動詞活用表

種類	受身	可能	使役	打消	過去及完了	推量	希望
語	られる	られる	させる	ぬ	た	らしい	たい
未然	られ	られ	させ		たら		
連用	られ	られ	させ	ず		らしく	たく
終止	られる	られる	させる	ぬ(ん)	た	らしい	たい
連體	られる	られる	させる	ぬ(ん)	た	らしい	たい
假定	られ	られ	せ	ね	たら		たけれ
命令	られよ	られよ	せよ				
接續	未然(右以外)	未然(右以外)	未然(四段)	未然	連用	終止、助詞ノ體言、助詞ノ體言、助詞ノ體言、助詞ノ體言	連用



〔第二表〕

口語動詞活用表

サ カ 變 變	下 段										上 段										四 段										種類 行名 例語															
	ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ	サ	ガ	カ	ア	ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ	ガ	カ	ラ	マ	バ	ハ		ナ	タ	サ	ガ	カ										
爲 る	來 る	植 ゑる	流 れる	越 える	染 める	述 べる	教 へる	連 ねる	出 てる	捨 てる	交 ぜる	失 せる	投 げる	受 ける	得 る	居 る	懲 りる	悔 いる	射 る	試 みる	見 る	延 びる	強 ひる	干 る	煮 る	恥 ぢる	落 ちる	案 じる	過 ぎる	生 きる	着 る	乗 る	踏 む	飛 ぶ	問 ふ	死 ぬ	打 つ	貸 す	騒 ぐ	聞 く	語 尾					
(爲)	(來)	植	流	越	染	述	教	連	出	捨	交	失	投	受	得	(居)	懲	悔	射	試	見	延	強	干	(煮)	恥	落	案	過	生	(着)	乗	踏	飛	問	死	打	貸	騒	聞	語 尾					
せし	こ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	り	い	い	み	み	び	ひ	ひ	に	ぢ	ち	じ	ぎ	き	き	ら	ま	ば	は	な	た	さ	が	か	未然					
し	き	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	り	い	い	み	み	び	ひ	ひ	に	ぢ	ち	じ	ぎ	き	き	り	み	び	ひ	に	ち	し	ぎ	き	連用					
する	くる	ゑ	る	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	る	い	い	み	み	び	ひ	ひ	に	ぢ	ち	じ	ぎ	き	き	ゐ	る	む	ぶ	ふ	ぬ	つ	す	ぐ	く	終止				
する	くる	ゑ	る	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	る	い	い	み	み	び	ひ	ひ	に	ぢ	ち	じ	ぎ	き	き	ゐ	る	む	ぶ	ふ	ぬ	つ	す	ぐ	く	連體				
すれ	くれ	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ゐ	れ	い	い	み	み	び	ひ	ひ	に	ぢ	ち	じ	ぎ	き	き	れ	め	べ	へ	ね	て	せ	げ	け	假定					
しせ ろよ	こ い	ゑ	よ	え	よ	め	よ	べ	よ	へ	ね	よ	で	よ	ぜ	よ	せ	よ	げ	よ	け	よ	ひ	よ	に	よ	ぢ	よ	じ	よ	ぎ	よ	き	よ	き	よ	れ	め	べ	へ	ね	て	せ	げ	け	命令

口語助動詞活用表

定 指	讓	敬	望 希	量 推	了完び及去過	消 打	役 使	能 可	身 受	種類 語 未然 連用 終止 連體 假定 命令 接 續
です だ	ます	られる	たがる たい	まい よう らしい	た	ぬ ない	させる せる	られる れる	られる れる	語
でせ だら	ませ	られ	たがら		たら		させ せ	られ	られ	未然
でし だつ	まし	られ	たがり たく	らしく		ず なく	させ せ	られ	られ	連用
です だ	(ます)	られる	たがる たい	まい よう らしい	た	ぬ(ん) ない	させる せる	られる れる	られる れる	終止
(な)	(ます)	られる	たがる たい	(まい) (よう) (らしい)	た	ぬ(ん) ない	させる せる	られる れる	られる れる	連體
なら	ますれ	られれ	たがれ		たら	ね なければ	させれ せれ	られれ	られれ	假定
	(ませ)						させろ せよ	られろ れよ	られろ れよ	命令
體言、助詞ノ 形容詞の終止	連用	受身のレル、 ラレルに同じ	連用	終止 體言、助詞ノ 未然(四段) 未然(右以外)	連用	未然	未然(四段) 未然(右以外)	ラレルに同じ、 受身のレル、	未然(四段) 未然(右以外)	接 續







【第三表】

口語形容詞活用表

種 類	例 語
(タ活用)	高 い
(シク活用)	新 しい
種 類	語 尾
(タ活用)	高 か
(シク活用)	新 し
未 然	
連 用	く
終 止	い
連 體	い
假 定	け れ
命 令	

口語形容動詞活用表

種 類	第一種	第二種
語 尾	新 <sup>アタラ</sup> し	立 派
語 尾	高 <sup>タカ</sup> か	静 か
未 然	から(ウ)	だら(ウ)
連 用	かつ(タ)	だつ(タ)
終 止		だ
連 體		な
假 定		なら(バ)
命 令		















昭和十二年九月十四日印  
昭和十二年九月十七日發  
昭和十三年一月二十六日訂正再版印刷  
昭和十三年一月二十八日訂正再版發行

改新文典 初年級用

定價金四十五錢



著者

橋本進吉

發行者

東京市神田區神保町一丁目三番地  
合資會社 富山房

代表者

同所 富山房社長  
坂本嘉治馬

印刷所

東京市京橋區木挽町三丁目十一番地  
新井電新堂

發行所

東京市神田區神保町一丁目三番地  
合資會社 富山房

電話神田二一七一—八  
掛替口座東京五〇二番



經行規

卷之四

山

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

2/5



Class 21

No 11

Name 川本直之

(A) Kawamoto

川

本

直

之